山口県埋蔵文化財調査報告第114集

立　石　遺　跡

－昭和62年度県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告－

1988

財団法人山口県教育財団
山口県教育委員会

序

近年，農業基盤整備事業が次第に進展をみせてきておりますが，これとともに，県下各地の埋蔵文化財が掘り起こされ消失していく頻度も多くなってまいりました。

私達の県土山口を築いてきた先人達の，その永い営みを今に伝える数多くの歴史遺産を，開発行為との調整を図りつつ記録にとどめて後世に残すため，財団法人山口県教育財団では教育・文化の振興という立場から，本年度も山口県農林部の委託を受け，圃場整備地区に係ります埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。

ここに報告いたしました美祢郡美東町所在の立石遺跡の調査では，縄文時代から中世にかけての集落関係遺構及び埋葬遺構等が発掘され，縄文土器などの多くの遺物が発見されました。これらの資料は，当時の人々の生活や文化を知る上で，貴重な手がかりとなっています。

発掘調査の成果をまとめた本書が，学術・教育の資料だけでなく，ふるさとづくりの基礎資料として広く活用されることを期待するものであります。

おわりに，調査にあたりまして御指導・御協力をいただきました関係各位に対し，深甚なる謝意を表するものであります。

昭和63年2月

財団法人山口県教育財団

理事長　高山　治

序

本県では，恵まれた自然環境の中で，豊かな地域社会の実現に向けて，農業基盤整備事業等の諸施策が推進されております。

これらの開発工事等からふるさとのかけがえのない埋蔵文化財を保護するとともに，開発と文化財保護との調和のとれた県土づくりを目指して，山口県教育委員会では，関係機関と協議を行い，同時に遺跡の保存や発掘調査を行っています。

昭和62年度には，美祢郡美東町にある立石遺跡について発掘調査を実施し，縄文時代から中世にかけての集落関係の遺構及び埋葬遺構を明らかにするとともに，当時の人々の生活や文化を知るうえで，貴重な資料を数多く得ることができました。

本書は，この調査成果をまとめた記録であり，文化財愛護への理解を深め，教育並びに学術研究上の基礎資料として広く活用されることを願うものであります。

おわりに，発掘調査の実施に当たり御協力いただいた関係各位に対し，厚くお礼申し上げます。

昭和63年2月

山口県教育委員会

教育長　高山　治

例　言

1．本書は，財団法人山口県教育財団と山口県教育委員会が昭和62年度に実施した県営圃場整備事業に伴う発掘調査のうち，美祢郡美東町大字長田に所在する立石遺跡の発掘調査に係る概要報告である。

2．調査組織は次のとおりである。

調査主体　財団法人山口県教育財団（理 事 長　高山　治）
　　山口県教育委員会　　（教 育 長　高山　治）
事 務 局　財団法人山口県教育財団（事務局長　田中義人）
　　山口県教育委員会文化課（課　　長　工藤公照）
調査担当　［総　括］　山口県埋蔵文化財センター（所長　工藤公照）
　　（次長　中村徹也）
　　［調査員］　財団法人山口県教育財団事務局　指導主事　大村秀典
　　山口県埋蔵文化財センター　文化財専門員　乘安和二三
　　同　調査補助員　木村明史
　　［援　助］　山口県埋蔵文化財センター職員

3．発掘調査の実施にあたっては，山口県農林部耕地課・山口県山口土地改良事務所・美東町役場・美東町教育委員会および地元関係各位から多大な援助・協力を受けた。

4．資料整理にあたっては，遺構・遺物実測図のトレースについて，山口大学大学院生柏本秋生氏の協力を得た。

5．本書に掲載した地図は，国土地理院発行50,000分の１地形図を複製した「美東町全図」（美東町役場・㈱アジア建設コンサルタント作成）を使用したものである。

6．本書に使用した方位は国土座標（第３座標系）で示し，レベルは海抜標高で標示した。

7．本書で使用した遺構略号は次のとおりである。

SB：掘立柱建物，SD：溝，SK：土壙，ST：埋葬遺構

8．本書の作成・執筆は，中村の助言・指導を得て大村（Ⅰ，Ⅲ-3）・乘安（Ⅱ，Ⅲ-１・２，Ⅳ）が分担し，乘安が編集した。

目　次

Ⅰ　位置と環境 …… 1

Ⅱ　調査の経緯と概要 …… 2

Ⅲ　遺構と遺物 …… 4

1．縄文時代 …… 4
2．古墳時代 …… 8
1）1号墳 …… 8
2）2号墳 …… 12
3）3号墳 …… 13
4）4号墳 …… 13
5）出土遺物 …… 14
3．古代～中世 …… 18
1）掘立柱建物 …… 18
2）土壙・土壙墓 …… 22
3）溝 …… 23
4）出土遺物 …… 23

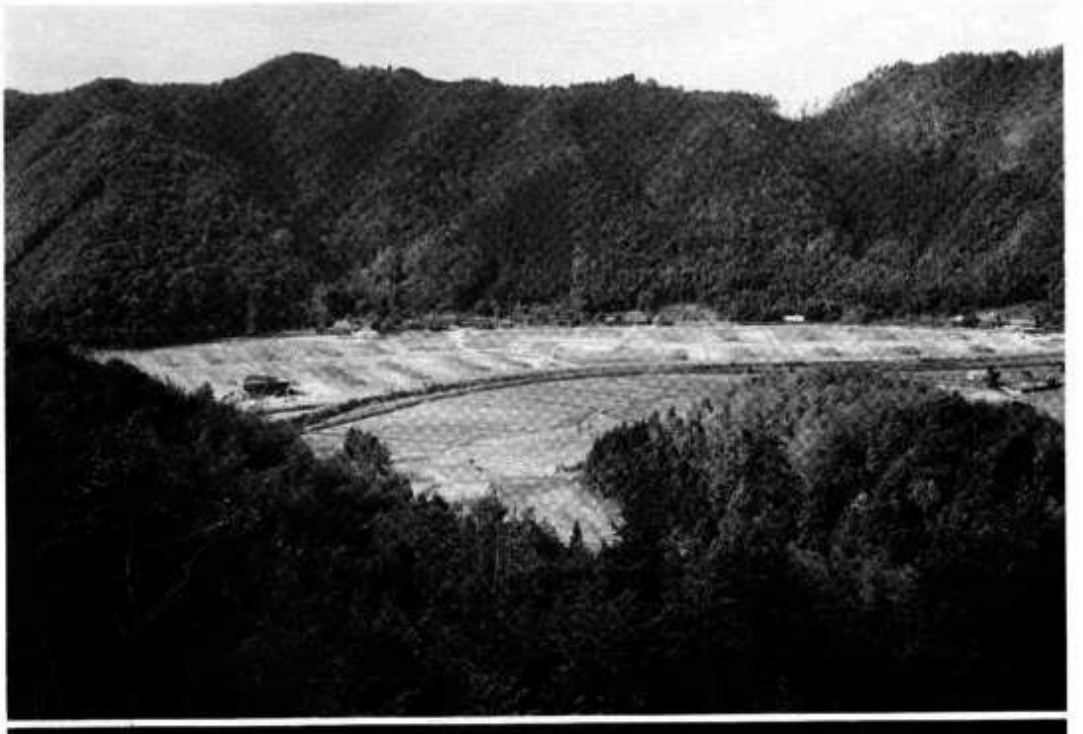
Ⅳ　まとめ …… 26

図 版 目 次

図版第1　上：遺跡遠景（東から）
　　下：調査前遺跡近景（東から）
図版第2　上：調査区全景（南から）
　　下：同上（東から）
図版第3　上：Ⅰ・Ⅱ地区全景（東から）
　　下：Ⅲ地区全景（東から）
図版第4　上：Ⅳ地区全景（東から）
　　下：Ⅰ地区1号墳全景（東から）
図版第5　上：1号墳ST-1全景（東から）
　　下：同上主体部（南から）
図版第6　上左：2号墳ST-2主体部（南から）
　　上右：2号墳ST-2全景（東から）
　　下左：2号墳ST-2主体部須恵器出土状況
　　下右：2号墳ST-2主体部耳環出土状況
図版第7　上左：3号墳ST-3周濠（南から）
　　上右：3号墳ST-3周濠（西から）
　　下左：3号墳ST-3須恵器出土状況
　　下右：3号墳ST-3須恵器出土状況
図版第8　上左：4号墳ST-4石室（南から）
　　上右：同上（北から）
　　下：同上（西から）
図版第9　左上：土壙SK-1（南から）
　　左中：土壙SK-2（北から）
　　左下：土壙SK-3（東から）
　　右上：溝SD-1（北から）
　　右下：Ⅲ地区縄文土器出土状況
図版第10　上：縄文土器
　　下：同上
図版第11　須恵器
図版第12　上：須恵器
　　下：耳環・鉄器
図版第13　上：土師器
　　下：白磁・青磁
図版第14　上：瓦質土器
　　下：石製品

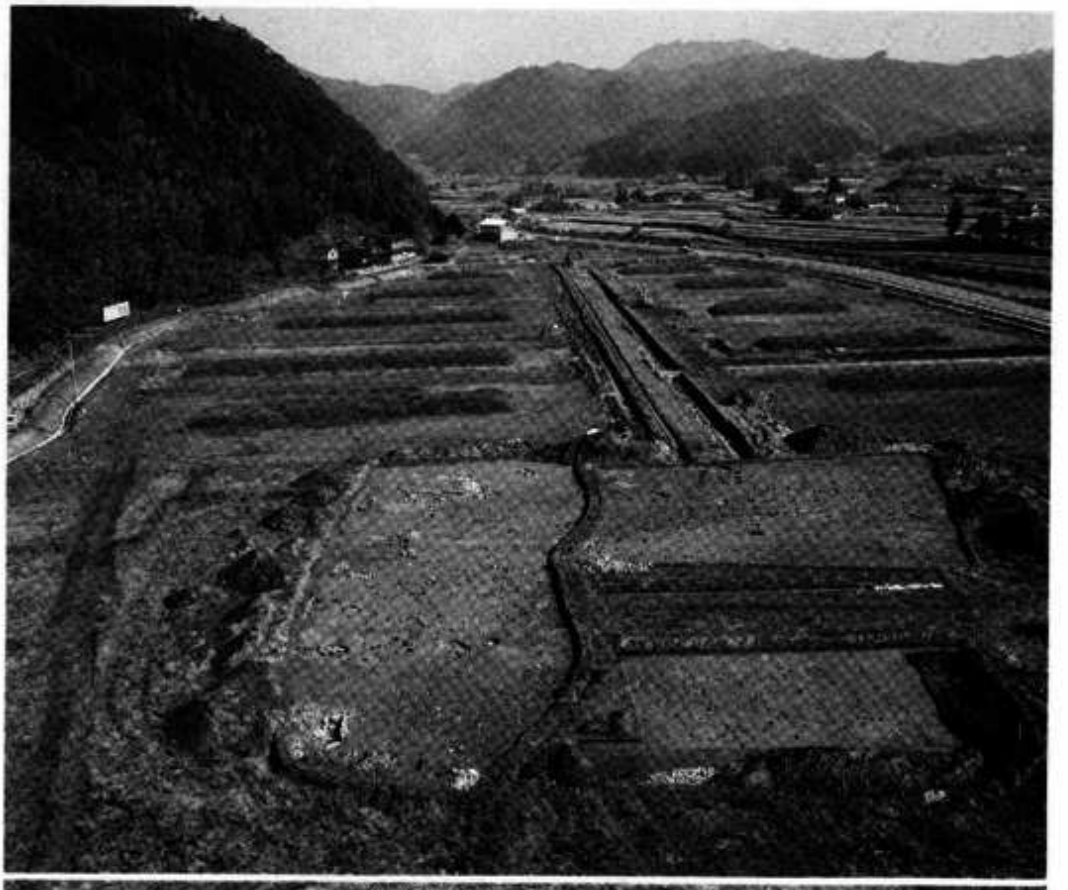
挿 図 目 次

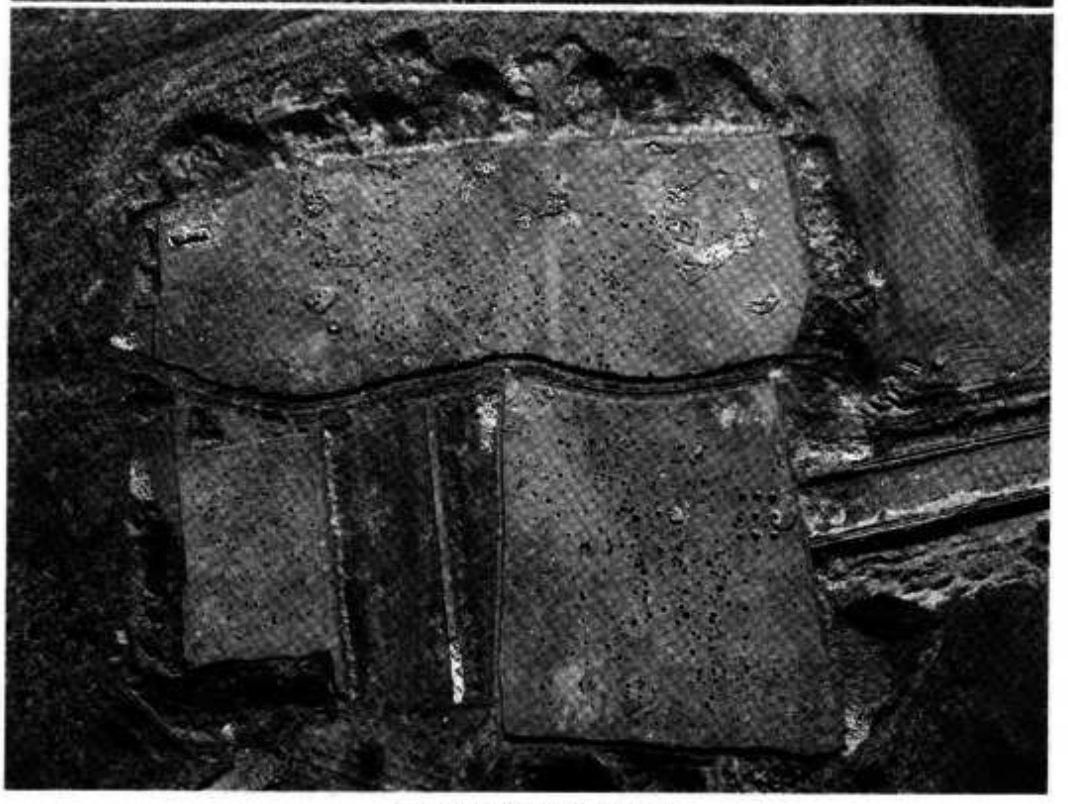
第1図　遺跡の位置と周辺遺跡分布図 …… 1
第2図　調査区設定図 …… 3
第3図　遺構配置図 …… 5～6（折込）
第4図　縄文土器拓影・実測図(1) …… 7
第5図　縄文土器拓影・実測図(2) …… 8
第6図　1号墳ST-1主体部実測図 …… 9～10（折込）
第7図　2号墳ST-2主体部実測図 …… 11
第8図　3号墳ST-3周濠部実測図 …… 12
第9図　4号墳ST-4石室実測図 …… 13
第10図　須恵器実測図 …… 15
第11図　須恵器・土師器実測図 …… 16
第12図　耳環・鉄器実測図 …… 17
第13図　掘立柱建物実測図(1) …… 19
第14図　掘立柱建物実測図(2) …… 20
第15図　掘立柱建物実測図(3) …… 21
第16図　土壙実測図 …… 22
第17図　陶磁器・土師器実測図 …… 23
第18図　瓦質土器実測図 …… 24
第19図　石製品実測図 …… 25



上：遺跡遠景（東から）
下：調査前遺跡近景（東から）

図版第2

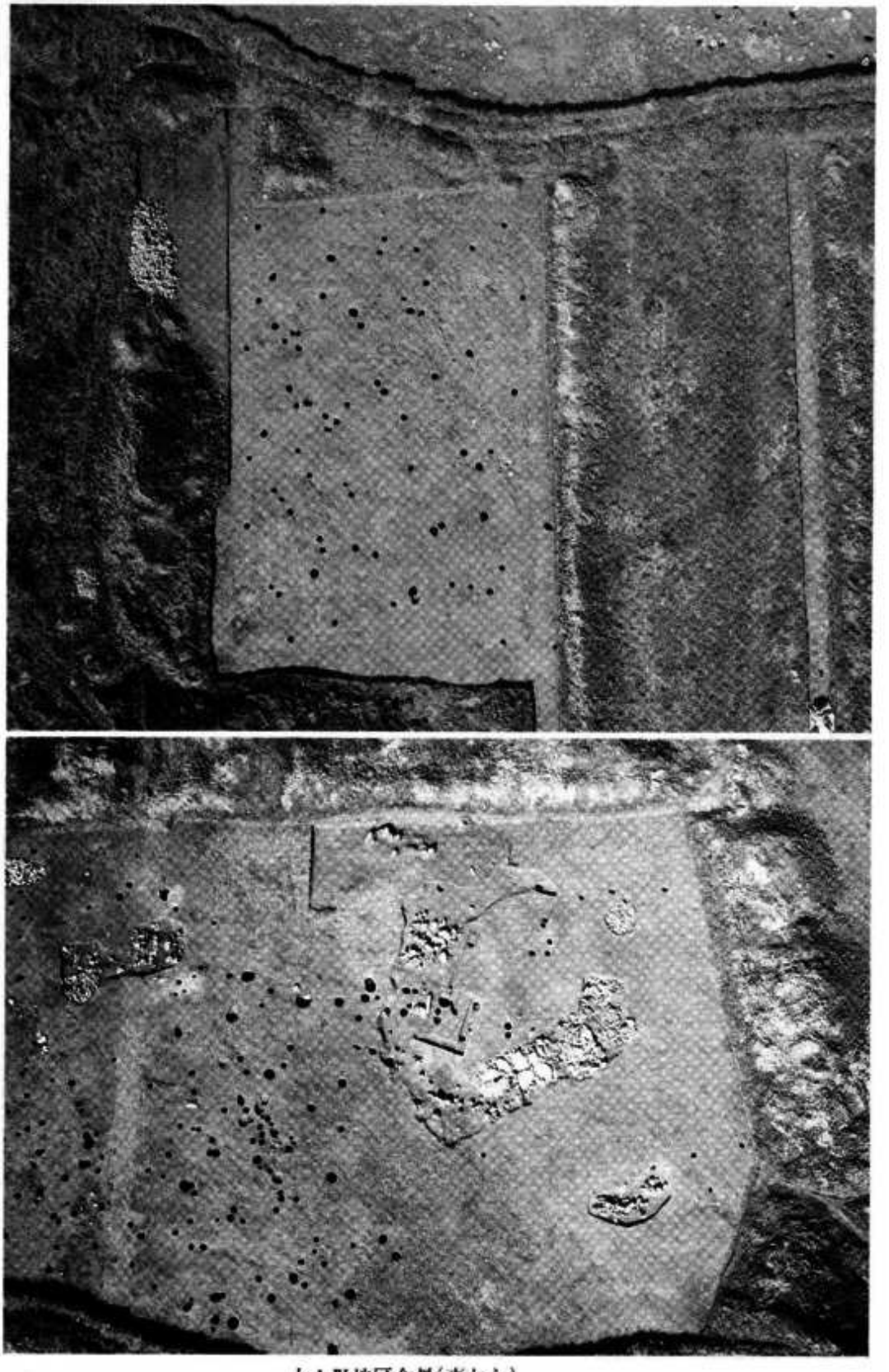




上：調査区全景(南から)
下：　同　上　(東から)

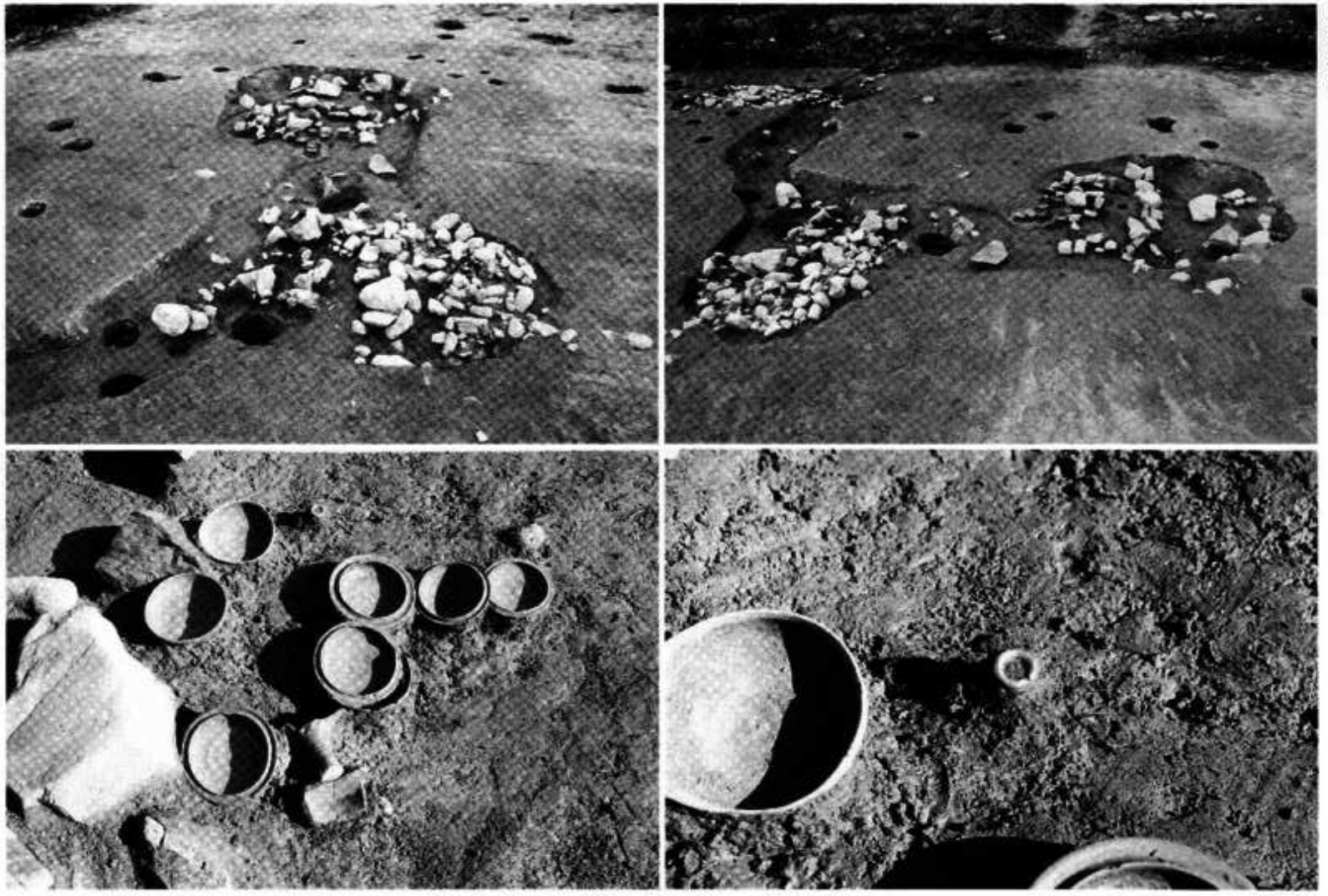
上：Ⅰ・Ⅱ地区全景(東から)
下：Ⅲ地区全景(東から)

図版第４

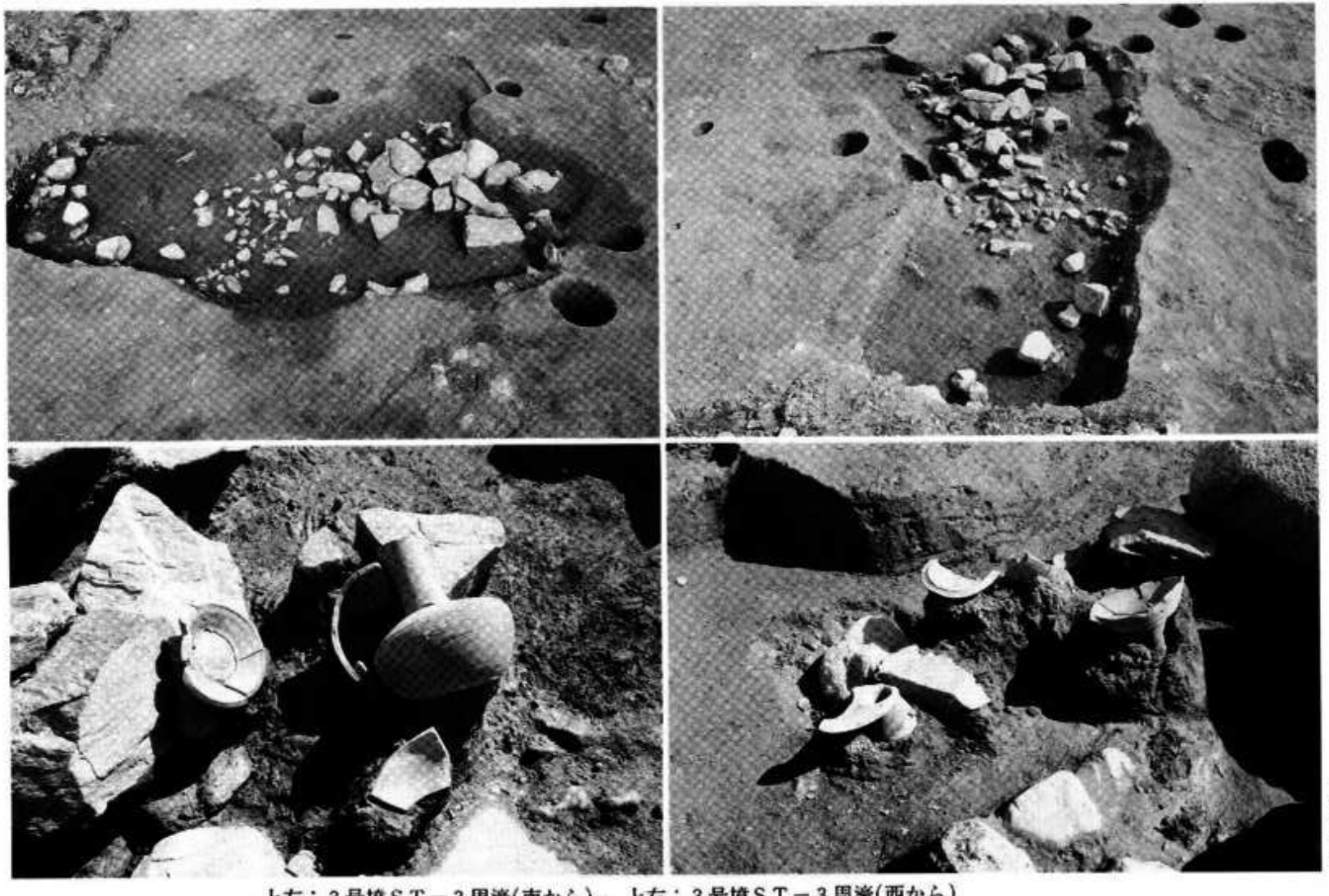


上：Ⅳ地区全景（東から）
下：Ⅰ地区１号墳全景（東から）

上：1号墳ＳＴ－１全景(東から)
下：　同　上　主体部(南から)



上左：２号墳ＳＴ－２主体部(南から)，上右：２号墳ＳＴ－２全景(東から)
下左：２号墳ＳＴ－２主体部須恵器出土状況，下右：２号墳ＳＴ－２主体部耳環出土状況

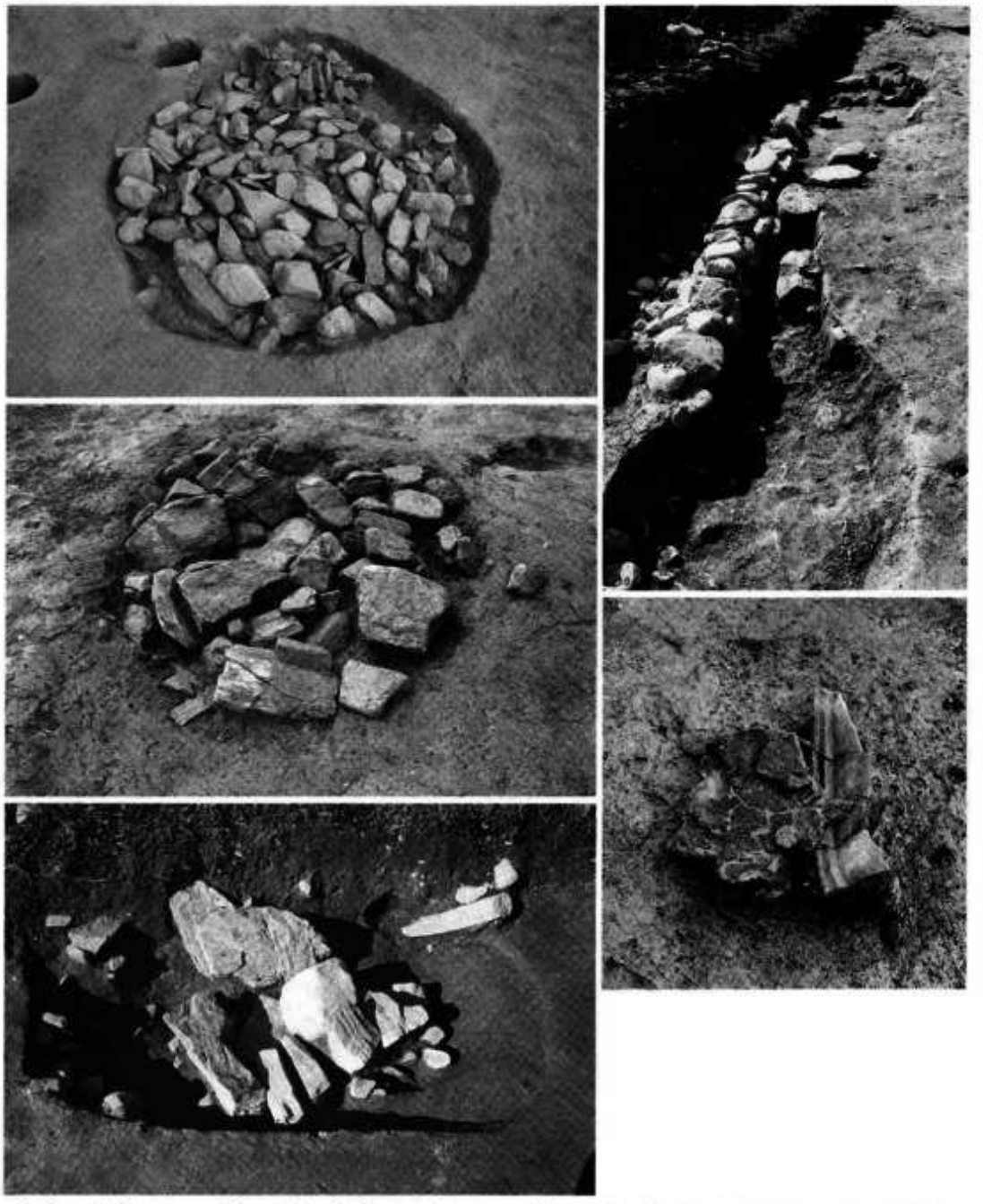


上左：３号墳ＳＴ－３周濠(南から)，上右：３号墳ＳＴ－３周濠(西から)
下左：３号墳ＳＴ－３須恵器出土状況，下右：３号墳ＳＴ－３須恵器出土状況

図版第７

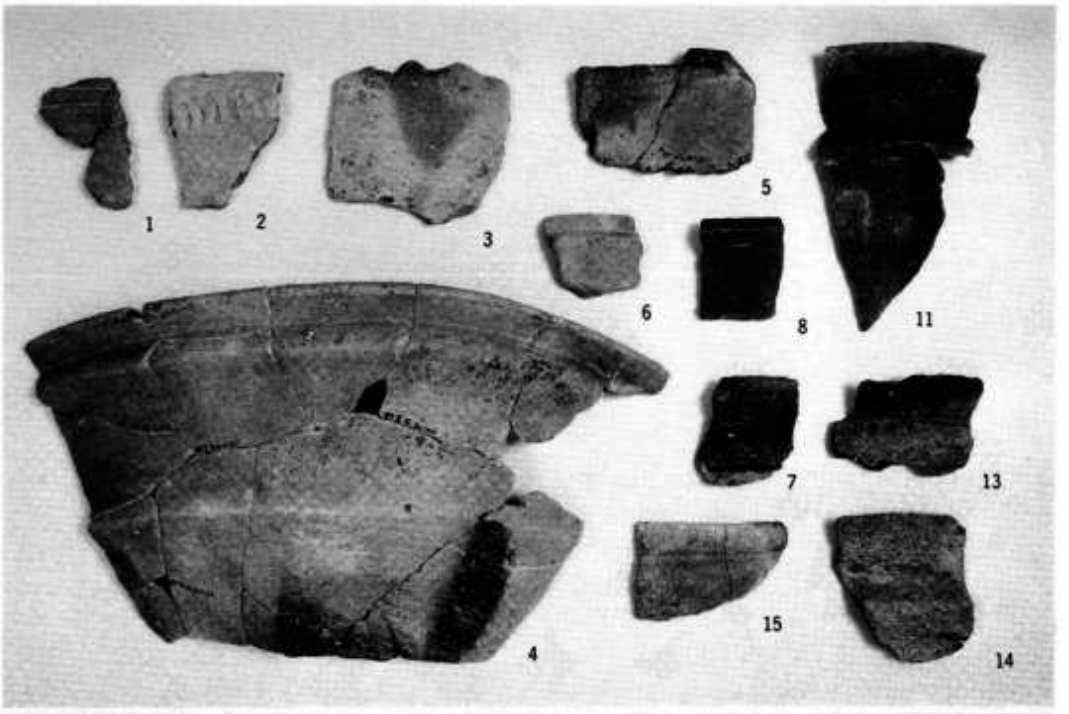
図版第８

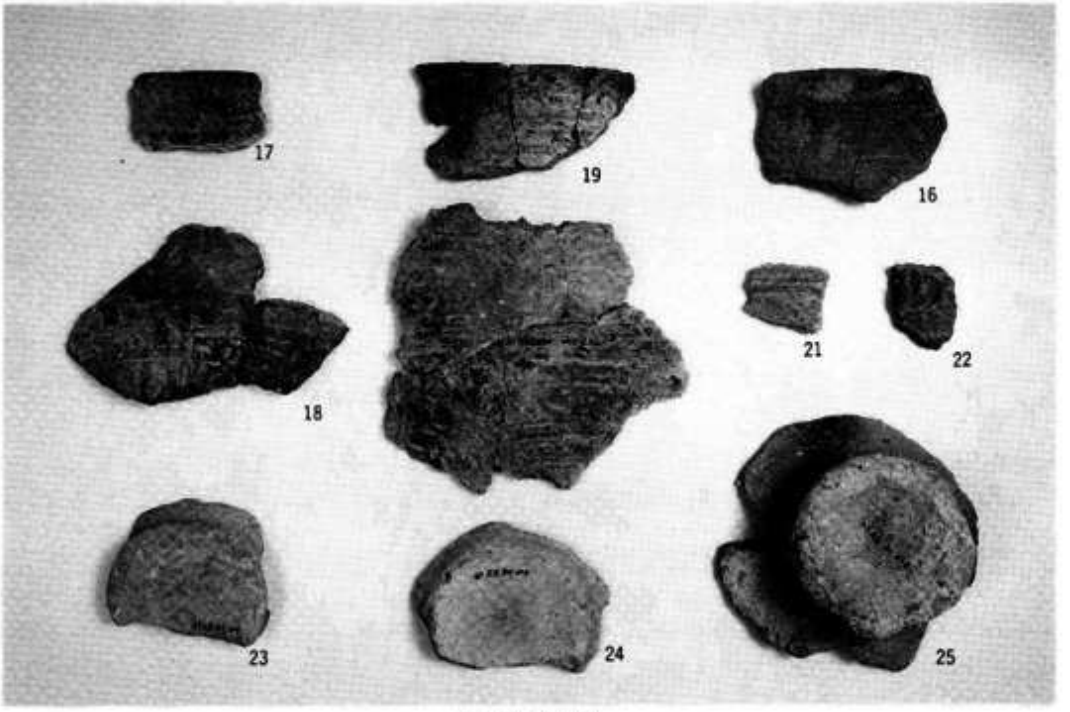
上左：４号墳ＳＴ－４石室(南から)
上右：　　同　上　　(北から)
下　：　　同　上　　(西から)



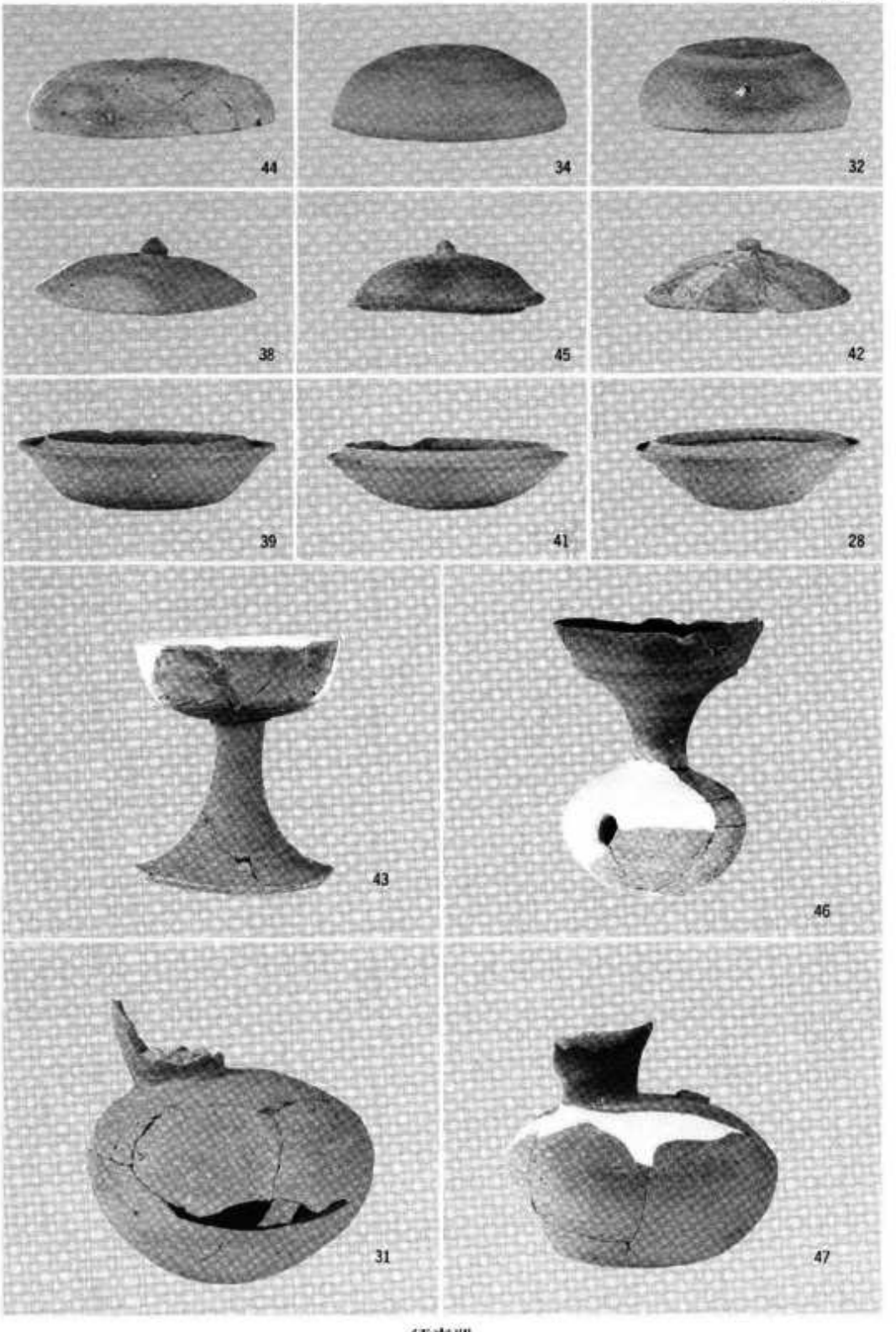
左上：土壙ＳＫ－１（南から），左中：土壙ＳＫ－２（北から），左下：土壙ＳＫ－３（東から）
右上：溝ＳＤ－１（北から），右下：Ⅲ地区縄文土器出土状況

図版第10



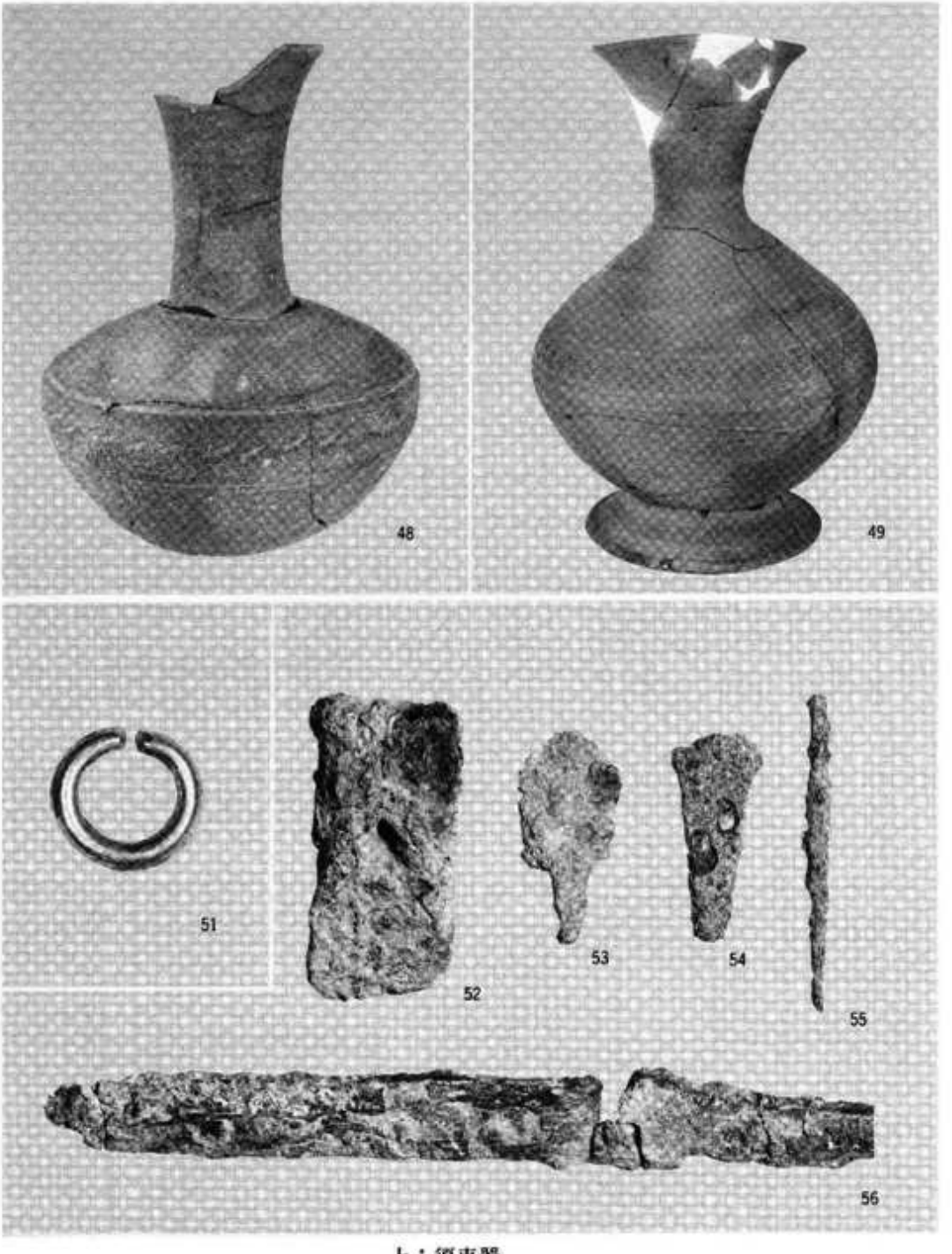


上：縄文土器
下：同　上

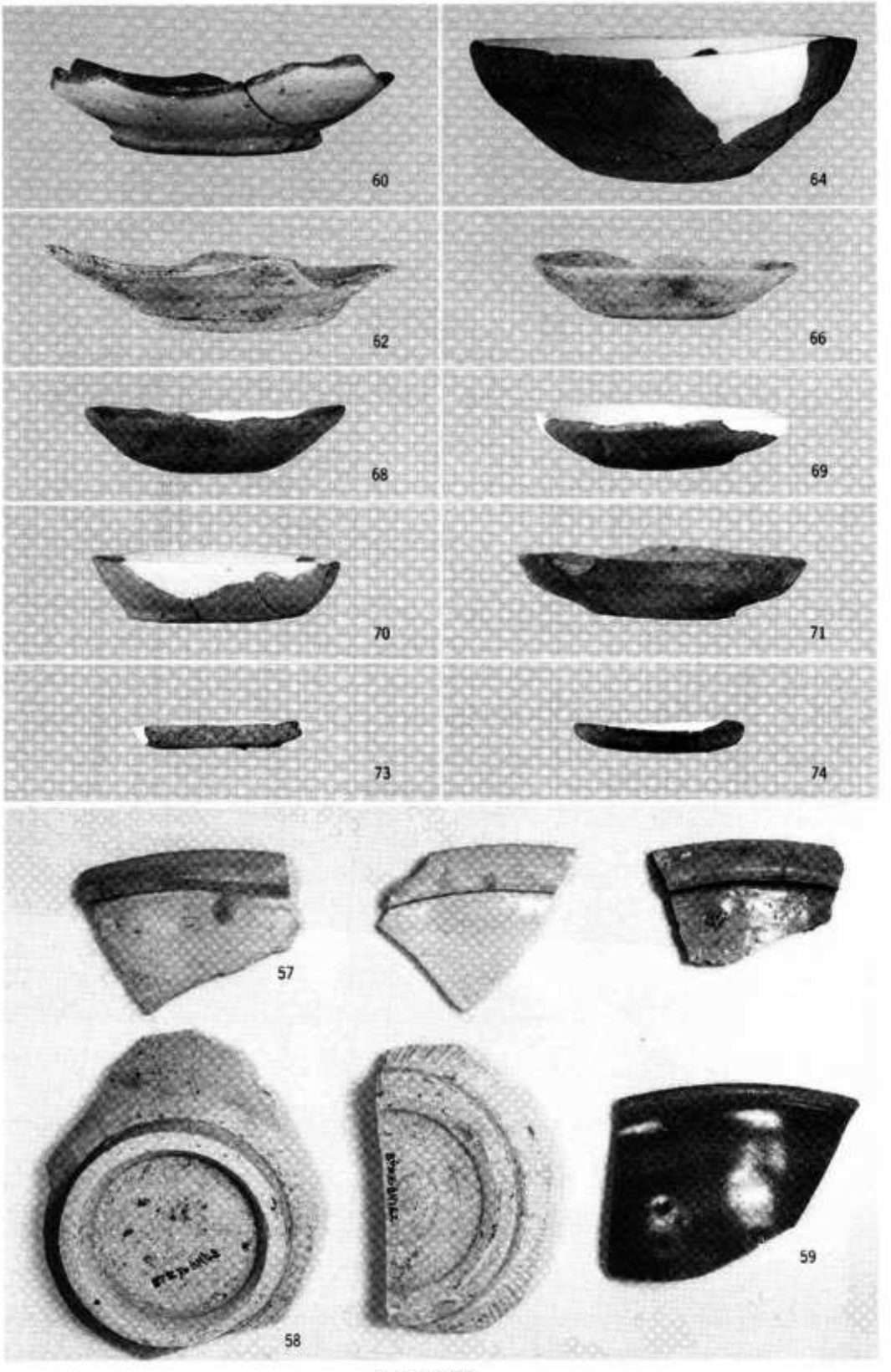


須恵器

図版第12

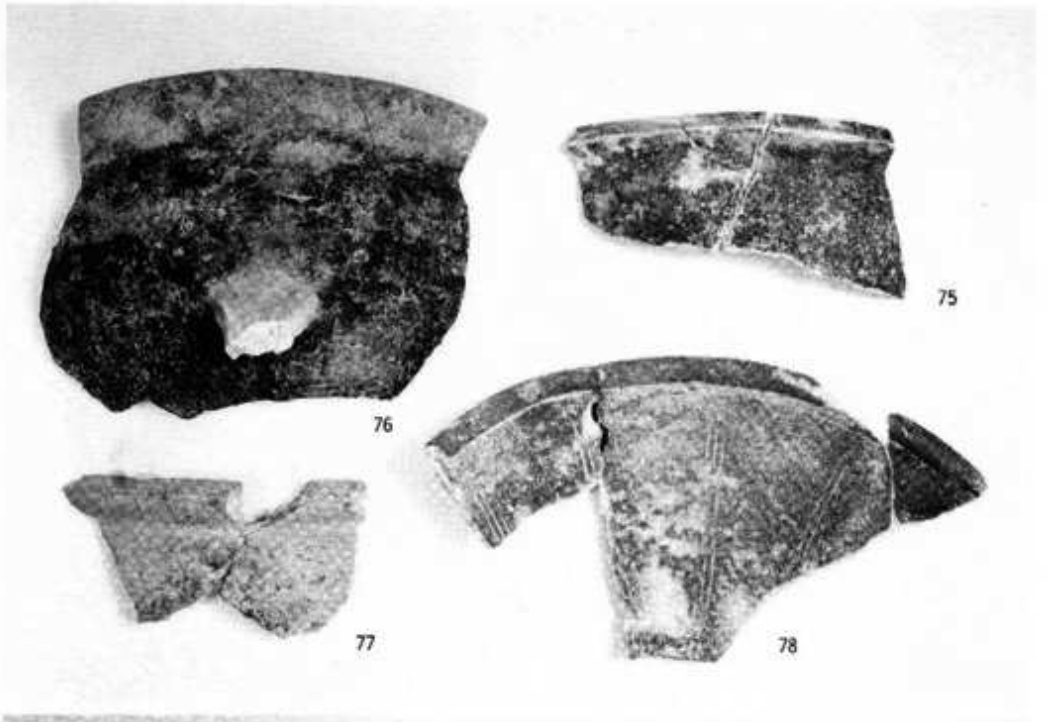


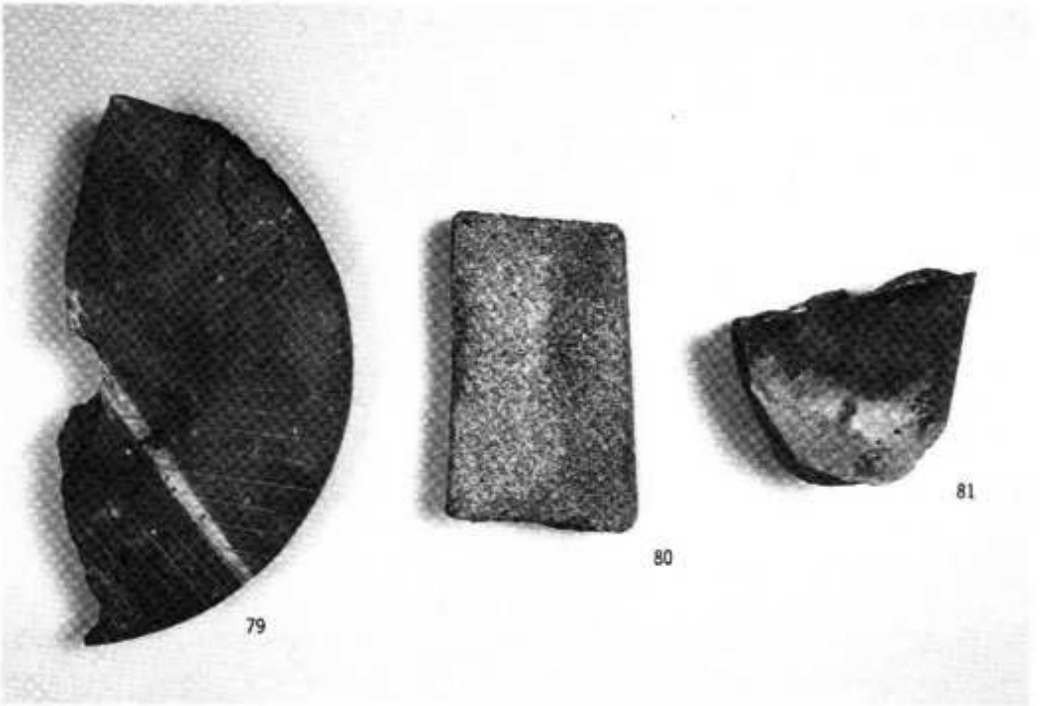
上：須恵器
下：耳環・鉄器



上：土師器
下：白磁・青磁

図版第14





上：瓦質土器
下：石製品

I　位置と環境

本遺跡は，美祢郡美東町大字長田字中立石に所在し(第1図)，遺跡名を立石遺跡と称する。

美東町は，山口県の中央部に位置し，県都山口市の北西に隣接する。南北に細長い町の大部分は，秋芳町に接する西側がカルスト台地（標高300m内外），阿武郡旭村と山口市に接する東

第1図　遺跡の位置と周辺遺跡分布図

側が500～700m級の山々によって占められ，厚東川の支流である大田川の中流域の大田盆地が比較的広い以外は，数少ない低地の多く（標高80～140m）は何れも小河川に沿った狭隘な谷底の沖積低地である。その中で町の南端に位置する長田地区は，県中央部有数の高峰・西鳳翩山（標高741m）の麓に源を発する長田川（大田川支流）沿いの狭い低地に展開している。集落の中心は，長田川東岸の支流郷川が形成した扇状地と洪積台地上にあるが，立石地区のみは長田川西岸の微高な自然提防と氾濫原上（標高95m前後）に立地しており，地区名からも窺えるように大変礫の多いところである。

美東町内の遺跡は，ほとんどが大田川及び長田川沿岸の洪積台地上に展開しており，分布状況についてはある程度知られているものの，その多くについては本格的な発掘調査が行われていない。従って詳細については不明な遺跡が多いのが現状であるが，以下知見している範囲で概略する。

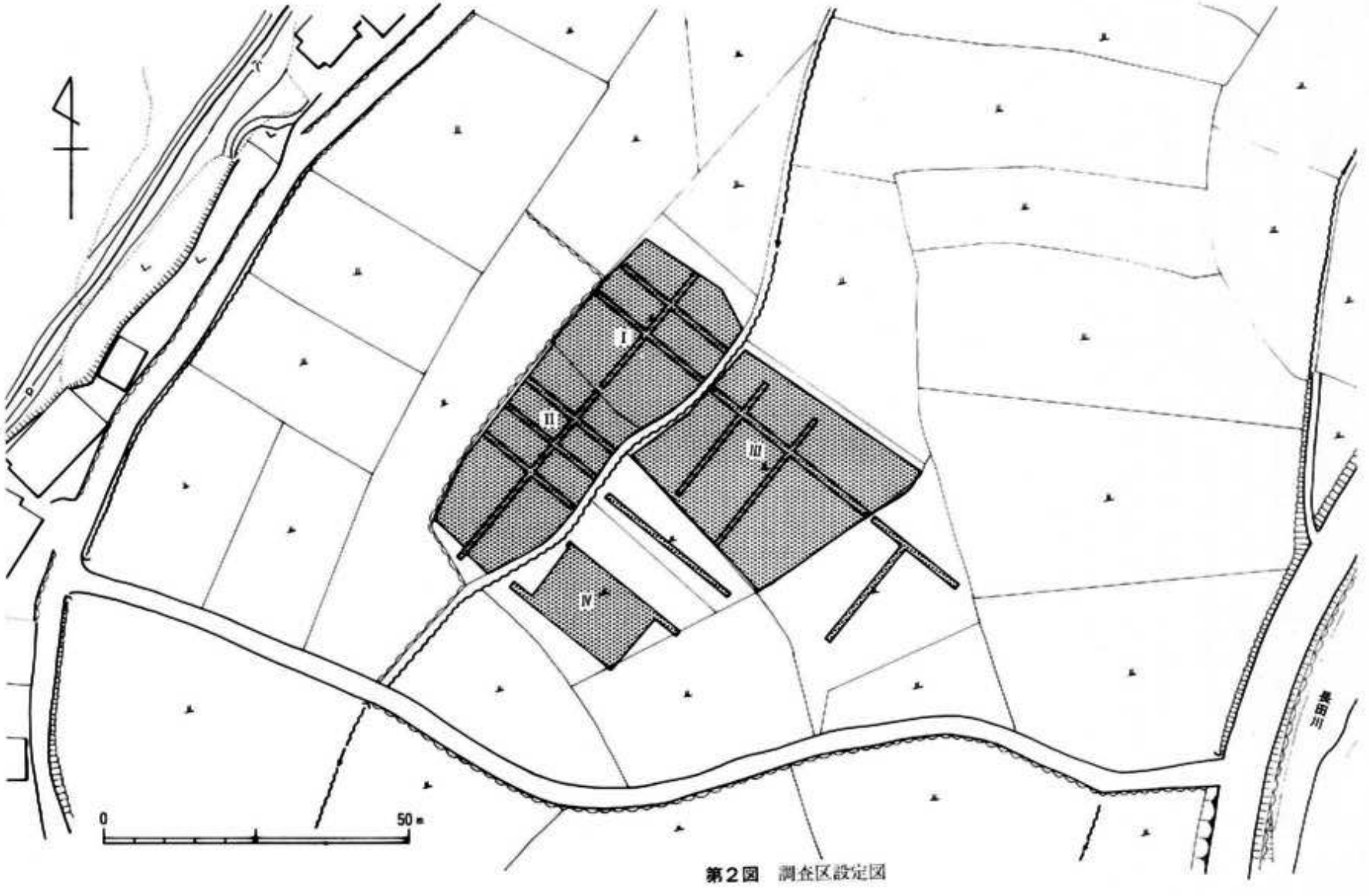
まず縄文時代では，カルスト台地上の遺跡として著名な長者ケ森遺跡での黒曜石剝片や赤郷佐山台でのチョッパーの採集などが知られているが，遺構については確認されていない。次いで弥生時代に入ると，絵堂の松原遺跡と綾木の岡の台遺跡が町内屈指の集落遺跡として知られている。古代以降では長登銅山（奈良～平安）が県内有数の銅山跡として有名であり，また，昭和62年に調査が行われた赤郷の銭屋遺跡は，寛永通宝の鋳銭所跡として全国的にも数少ない遺跡として貴重な遺跡である。残念ながら現在までのところ，町内においては古墳の確認例がなく，古墳時代の資料発見は今後に期待されている。

II　調査の経緯と概要

立石遺跡は長田川西岸の微高地に立地しており，縄文時代から中世にかけて間歇的に形成された集落・埋葬遺跡である。近年，県内では各地で農業基盤整備事業が進められており，水田景観は大きく変貌をとげつつある。遺跡の所在する美東町長田地区についても，昭和60年度以降，圃場整備事業計画が具体化されるに及び，同年度に山口県教育委員会により事業施工予定地区内の予察調査が実施された。この結果，大字長田字中立石地内から古墳時代や中世の遺構が確認されたことにより，当該地区一帯の呼称から「立石遺跡」として遺跡発見の手続きが取られるとともに，県農林部耕地課と今後の取扱について協議がなされた。遺跡周辺の事業実施は昭和62年度の予定となり，当該年度に事業と併行して発掘調査を実施することとなった。

調査は，財団法人山口県教育財団が山口県農林部から委託を受け，さらに山口県教育委員会が文化庁の国庫補助を受けて両機関が共同で行なうこととなり，昭和62年9月16日から同年11月14日まで実施した。

調査地区は，南北に細長い微高地の中央部から南寄りにかけて位置しており，島状にやや高まりを示す個所に当たる。西側には山麓との間に狭い谷筋が走り，東側は長田川の氾濫原に続いている。微高地自体がかつての自然提防であったものと推定される。調査に際しては，こう



第2図　調査区設定図

した地形の形状を考慮しながらまず対象地区内にトレンチ計15本を設定して遺構の広がりや分布密度等を把握し，計4地区について面的な発掘を行なうこととした（第2図）。

各地区とも，ほぼ全面にわたって古墳時代から中世にかけての遺構の分布が認められた（第3図）。南北には若干まだ遺構が広がるものとみられるが，島状の微地形からみてそれほど広がりを持つとはみなしがたい。各地区の基本的な層序は，①耕土，②床土，③黄褐色～灰褐色粘質土，④砂礫層となっており，各遺構は第3層上面と一部第4層上面で検出された。なお，III地区の南端や北端・東端，III地区とIV地区の間のトレンチ，さらにII地区南端などでは床土の下に砂礫層が認められた。これは，遺跡の形成以前のかなり古い段階に調査地一帯が氾濫原となり，それ以後第3層が堆積し，中世まで遺跡が形成された以後，一帯の水田開発で上面が削平された結果を示すものと考えられる。この一帯の水田開発は中世末頃と推定され，かなり大規模に旧地形が削平されたものとみられる。

なお遺構面検出の段階で，各地区から縄文土器片が出土した。III地区東半部を中心に層序的な深掘りを行なって遺構の検出を試みたが，確認するには至らなかった。

III　遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構には，古墳4基，古代から中世の掘立柱建物13棟，柱穴多数，土壙3基，溝1条などがある。また出土遺物には縄文土器，須恵器，土師器，瓦質土器，輸入陶磁器，鉄器，耳環，石製品などがあった。以下，時代ごとに遺構と遺物について概要を記しておきたい。

1．縄文時代

量的な差はありながらも，各地区から縄文時代後・晩期の土器片が検出された。これらは遺構に伴なうものではなく，古墳や中世の遺構が検出された第3層上面及び第3層の中から出土したものである。この第3層については，かなり広い範囲にわたって層序的な掘り下げを行なったが，遺構を確認するには至らなかった。土器以外に姫島産や隠岐島産と推定される黒曜石の剝片類も出土しており，この一帯に当時の生活の場があったことは想定し得るであろう。

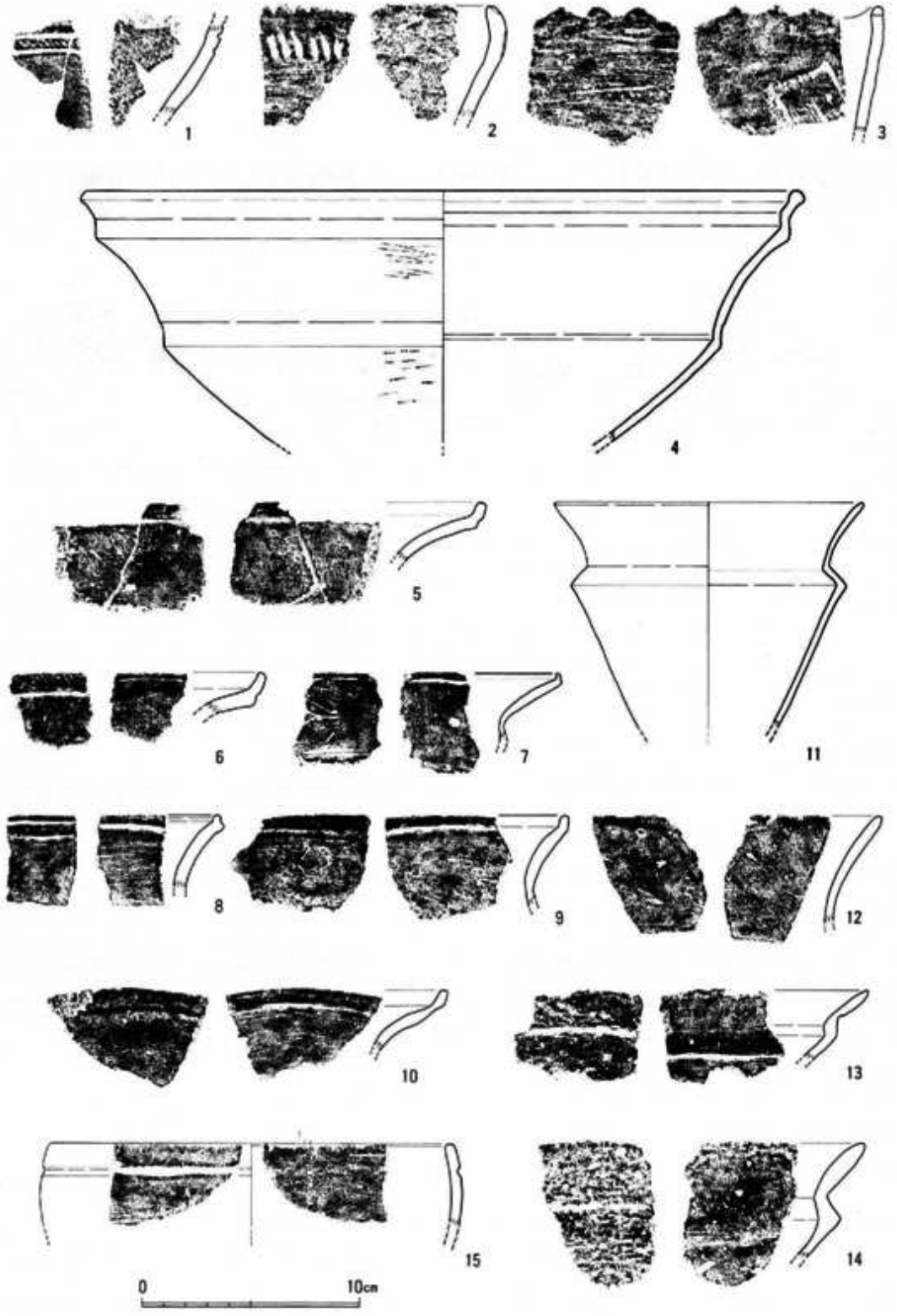
出土した縄文土器(第4・5図)は，大半が晩期のものであり，若干後期のものが含まれている。

後期の土器としては，3本沈線に磨消縄文の認められるもの(1)，内彎する口縁の肥厚部に刺突文，口唇部に刻目文を有するもの(2)，波状口縁の波頭部に押圧による山形の凹みをもつもの(3)などがある。

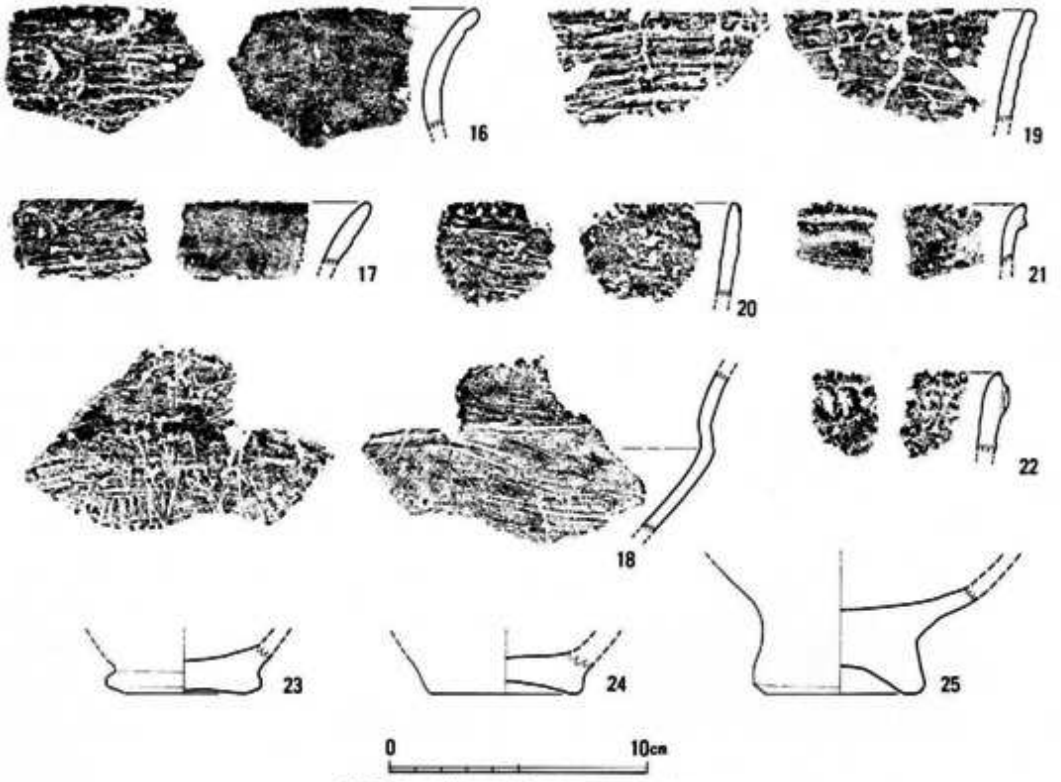
晩期の土器は，表裏磨研の精製土器(4～14)と貝殻条痕調整の著しい粗製土器(16～25)に大別される。精製土器には，胴部中位で内側に屈曲しながら外反し，さらに口縁が上方に短く立ち上がり，端部を丸くおさめる浅鉢形のもの(4～10)がある。これらのうち，5～8の口縁外側には浅い1条の沈線がめぐる。さらに，胴部上位で内側に鋭く屈折し，口縁が外反気味に立

SK-1
ST-1
SB-1
ST-2
SB-2
SB-3
SB-4
ST-3
SK-2
ST-4
SB-5
SD-1
SB-10
SB-6
SB-8
SB-9
SK-3
SB-7
SB-11
SB-12
SB-13
0
10m

第3図　遺構配置図



第４図　縄文土器拓影・実測図(1)



第5図　縄文土器拓影・実測図(2)

ち上がる鉢もしくは浅鉢形のもの(11～14)や，胴部が内彎して立ち上がり，口縁下に沈線1条を巡らすもの(15)などがみられる。

粗製土器は，胴部上位で内側に屈曲しながら外反気味に立ち上がり，口縁部に続く深鉢形のもの(16～19，17と18は同一個体)，口唇部外側に刻目を施すもの(20)，口縁直下に刻目を有する突帯を巡らし，口唇部にも刻目を施すもの(21・22)などがある。底部には，平底(23)と上げ底(24)，凹底(25)のものがみられる。

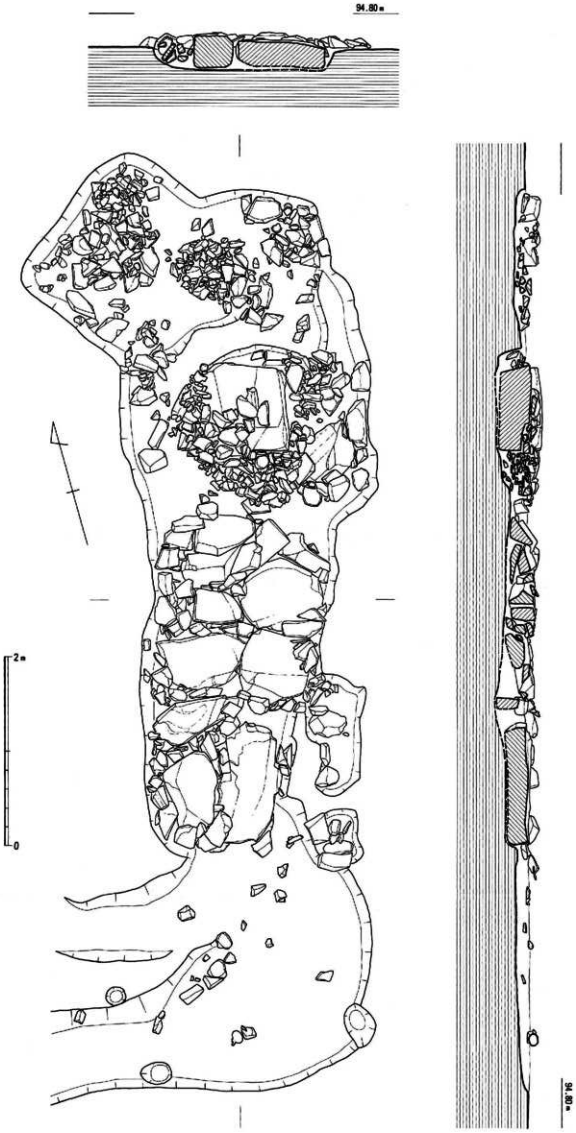
以上の縄文土器は，後期のものが月崎上層Ⅰ式にほぼ対比し得るものとみられ，晩期のものは，4～10・15・16～20が月崎上層Ⅲ式・岩田Ⅳ類に，21・22が月崎上層Ⅳ式・岩田Ⅴ類に対比されよう。11～14は，月崎上層Ⅳ式ないし若干先行するものであろう。

2．古墳時代

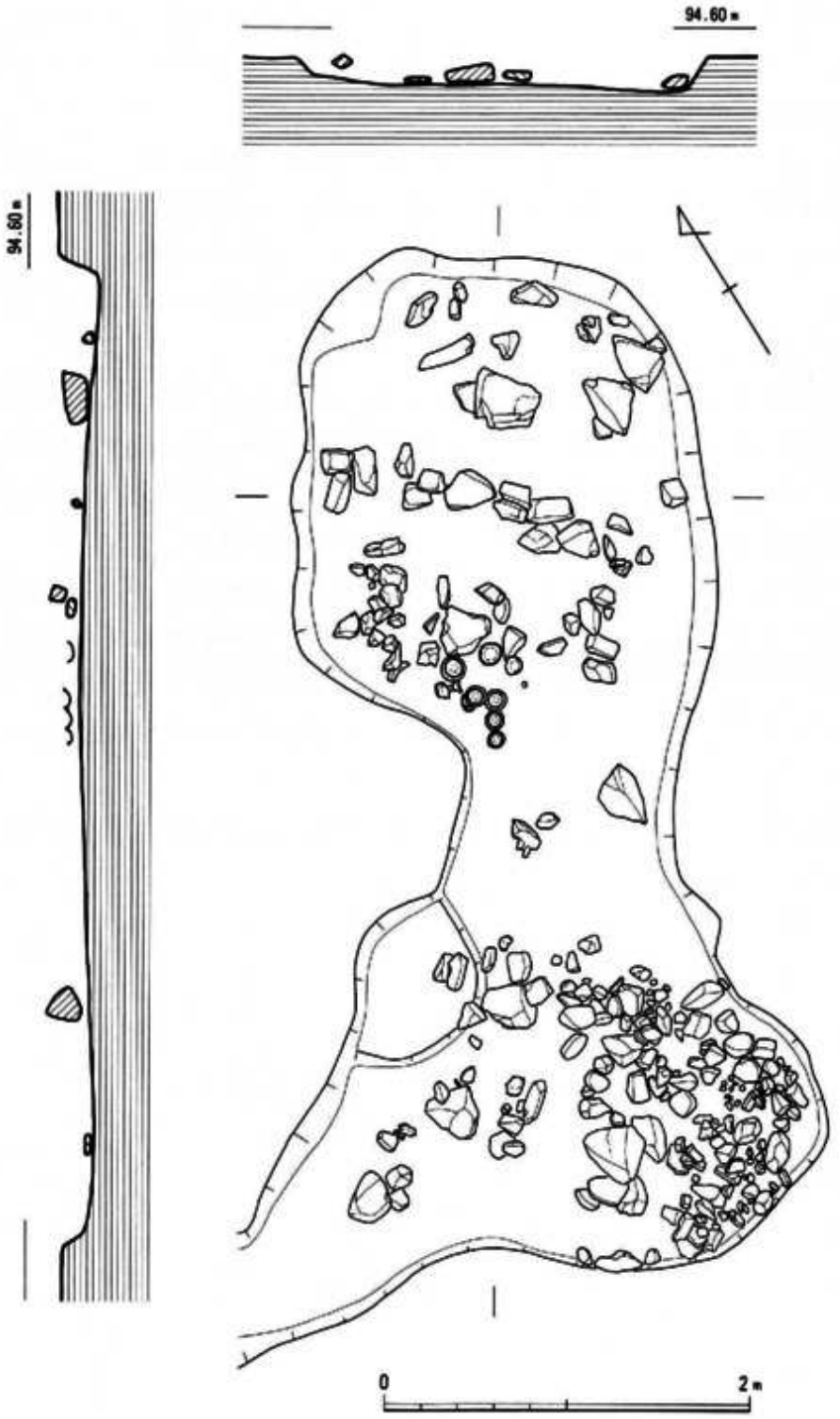
1) 1号墳（第6図）

中世末頃の水田開発によって墳丘は削平され，石室及び周濠の一部が残存していた。墳丘基底部の直径約12m。周濠を含めた直径約16mの円墳と推定される。

主体部は南向きに開口する横穴式石室であったとみられるが，天井石や側壁の石は全て抜き取られており，床面の敷石の一部が残存するのみであった。石室掘り方も基底部近くが残存するのみで，奥壁側は中世の攪乱を受けていた。掘り方は，長さ約7m，幅は広い所で2.6m。敷石は南半部によく残存しており，大きな板石が用いられて隙間に小角礫が充塡されていた。当



第6図　1号墳ＳＴ－１主体部実測図



第7図　2号墳ＳＴ－２主体部実測図

初これらの板石は石室の側壁が内側に倒れ込んだものとみていたが，各石材の上面がほぼ同じレベルで平坦であることや，板石の下面が有機質土層を介在せずにすぐに地山に接していること，板石の上面には須恵器片が散在していたことなどから，敷石の一部と判断した。また，奥壁部付近からは須恵器杯蓋（第10図27・29）が検出されている。

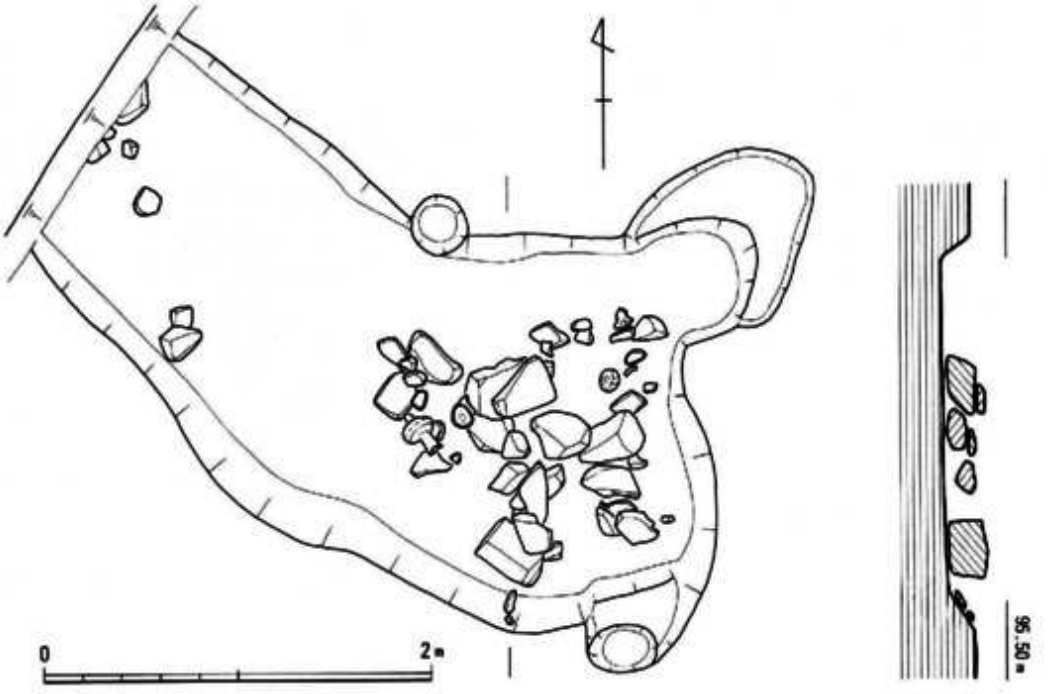
周濠は主体部の西側に比較的よく残り，幅2 m，深さ10cm 前後をとどめる。濠内には小礫が散在し，須恵器の杯蓋（第10図28）や鉄鏃片（第12図55）が出土した。また石室入口付近では，須恵器の甕片や杯蓋（第10図26）・平瓶（第10図31）が検出された。主体部の東側にも周濠の一部が残存しており，小礫とともに須恵器の高杯片（第10図30）・甕・杯蓋片などが検出された。

2) 2号墳（第7図）

1号墳の西南側に位置し，これも墳丘は完全に削平されて残存しない。主体部は，南向きに開口する横穴式石室であったと推定されるが，天井石や壁体の石材は全く残らず，石室掘り方と周濠の一部をとどめるのみである。主体部と周濠の残存状況や，1号墳との位置関係を考慮すれば，墳丘規模は1号墳とほぼ同程度かやや小さかったものと推定されよう。

残存する掘り方の形状からみれば，片袖式の石室であった可能性も想定されよう。とすれば，玄室部の掘り方は，長さ2.6m，幅2.3m，残存する深さ20cm 前後，羨道部の幅1.2m 程度である。玄室部掘り方内には，10～30cm 程度の角礫が散在していたが，敷石ないしは壁体裏込めの一部であったものと思われる。また入口部付近の集石群は，中世末頃における古墳破壊時の所産とみられる。

玄室部の西南隅寄りには，完形ないし完形に近い須恵器の杯蓋4点（第10図32～34・38）・杯



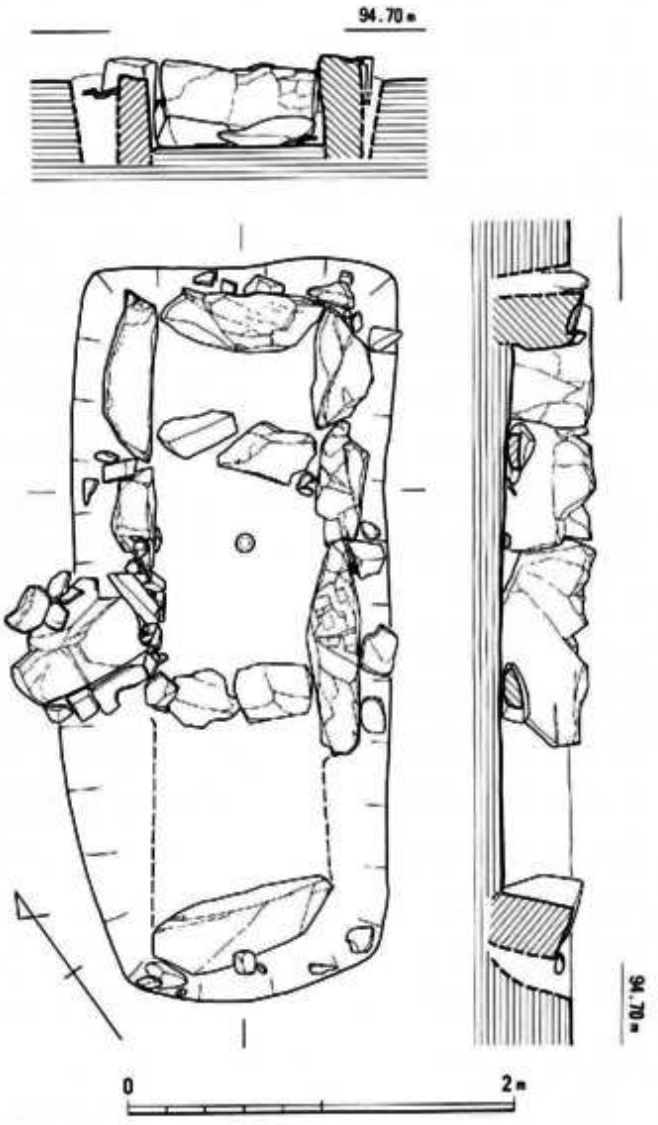
第8図　3号墳ＳＴ－3周濠部実測図

身4点（第10図39～42）・高杯1点（第10図43）と耳環1点（第12図51）がまとまって出土した。これらは掘り方の床面から5cm前後浮いているが，ほぼ原位置に近い状態ではないかとみられる。さらに入口付近からも須恵器の杯蓋（第10図35・36）・杯身・壺片が散乱して出土した。

主体部の西南側には周濠の一部が残存していた。幅は1.2m，深さ約10cm前後で，中から須恵器の甕片が検出された。

3) 3号墳（第8図）

2号墳の西南側に位置する。墳丘・主体部ともに完全に削平を受け，わずかに周濠の一部が残存するのみである。周濠の幅は1.6m前後，深さは約20cmをとどめる。内部には10～30cm程度の角礫が散乱し，その間に須恵器の壺（第11図48・49）・平瓶（第11図46・47）・杯蓋（第11図44・45）などが壊れた状態で検出された。



第9図　4号墳ST－4石室実測図

こうした状況のみで破壊された古墳の一部とみなすことには躊躇するが，1・2号墳の検出状況やこれらとの相互の位置関係，遺物の出土状況などを勘案して古墳の一部と判断したものである。

4) 4号墳（第9図）

3号墳の西南側に位置する。墳丘は完全に削平を受けており，主体部の石室基底部のみが残存していた。石室自体も中世末頃の段階に破壊を受け，腰石の上端は打ち欠かれ，南半部の壁体は原位置を動いていたり，抜き取られていた。石室内の埋土上半までは攪乱を受け，中世の土師器片などが混入していた。

石室掘り方は，長軸を北東から南西にとり，長さ約3.8m，幅1.6m，深さ35cm。壁体の形状

は一見箱式石棺風であるが，床面に棺台とみられる4個の角礫が置かれていることや，南側小口の石材が北側小口のものに比べて整然とした配置状況にないことなどから，これを梱石とみれば，南側小口部の削平や攪乱が著しいため判然とはしがたいものの，南向きに開口する竪穴系横口式石室の可能性が考えられよう。

石室規模は，内法で長さ2.8m，幅80cmで，残存する深さ約40cm。奥壁腰石は1枚の分厚い板石を横長に据え，右側壁に3枚，左側壁に3枚(うち1枚は原位置を移動)の腰石が立てられていた。本来左右側壁の腰石は各々4枚の石材で構築されていたものと推定される。横口部基底面には，梱石かとみられる分厚い石材1枚が横長に据えられている。閉塞や墓道部の状況は削平・攪乱のため明らかでない。掘り方や石室の規模・形状からみて，実質的には竪穴式石室としての機能を果たしていた可能性が強いとみられる。

石室床面の中央部から土師器の杯1点(第11図50)，奥壁から2枚目の右側壁腰石の側から袋状鉄斧1点(第12図52)と鉄鏃2点(第12図53・54)が出土した。

5)出土遺物

a. 1号墳出土遺物

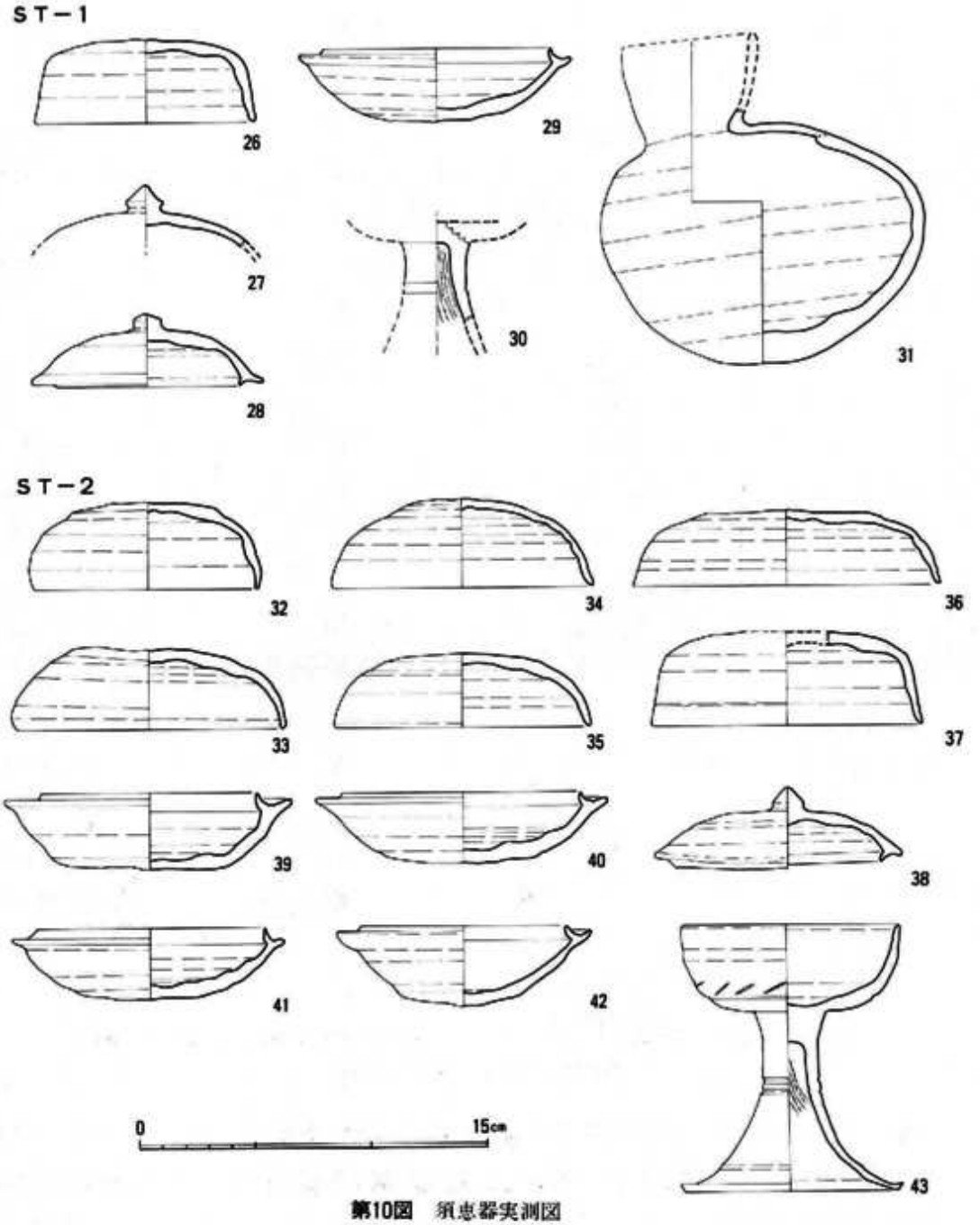
須恵器(第10図26～31) 杯蓋には天井部に摘みを持たないもの(26)と宝珠状摘みを有し，口縁内面にかえりをもつもの(27・28)がある。26は，平坦な天井部から屈曲しながら体部が開き，口縁端は丸い。天井部は回転ヘラ削り，天井部内面は不整方向のナデ，他は回転ナデ調整。27・28は天井部から体部が膨らみをもって口縁に至る。内外面とも回転ナデ調整を基調とする。29は杯身で，蓋受けの立ち上がりは低い。底部外面は回転ヘラ削り，内面は不整方向のナデ，他は回転ナデ調整である。30は高杯の杯部から脚部へかけての破片で，脚部に沈線1条がめぐる。31は平瓶。口縁はやや内彎気味に立ち上がり，最大径は体部のやや上位にあり，底部は丸底。体部下位は回転ヘラ削り，他は回転ナデ調整。

鉄器(第12図55) 鉄鏃の茎部分とみられる。現存長11.8cm，断面は方形を呈する。

b. 2号墳出土遺物

須恵器(第10図32～43) 32～38は杯蓋で，32～37は天井部から体部が内彎しながら口縁に続く。口縁部は丸みを持つ。38は天井部に宝珠状摘みを持ち，口縁内面にかえりを有する。いずれも天井部は回転ヘラ削り，天井部内面は不整方向のナデ，他は回転ナデ調整を基調とする。39～42は杯身で，受部の立ち上がりは低い。42はやや口径が小さくて深い。いずれも底部外面は回転ヘラ削り，底部内面は不整方向のナデ，他は回転ナデ調整を基調とする。43は高杯。杯部は体部が内彎気味に立ち上がり，脚部は裾に向かって大きく開き，脚端が上方に跳ね上がる。杯部の底端部に櫛歯状の列点文と沈線1条，脚部中央に沈線2条がめぐる。器面は回転ナデ調整。

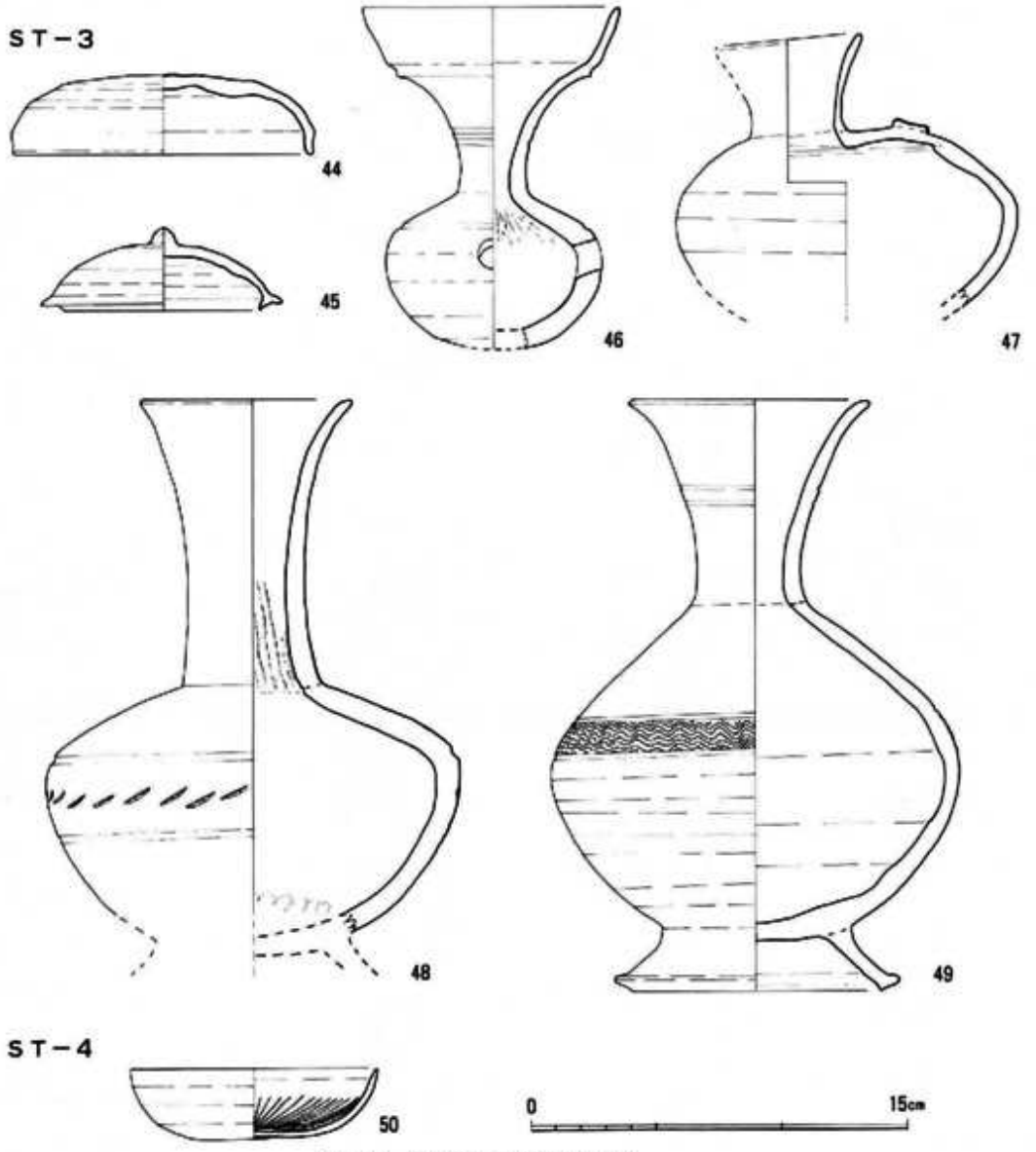
耳環(第12図51) 銅地に金箔を被せたもので，遺存状態は極めて良好である。外径2.31cm，内径1.3cmのほぼ円形を呈する。環の断面は5.1×7.6mmの長円形を呈す。



第10図　須恵器実測図

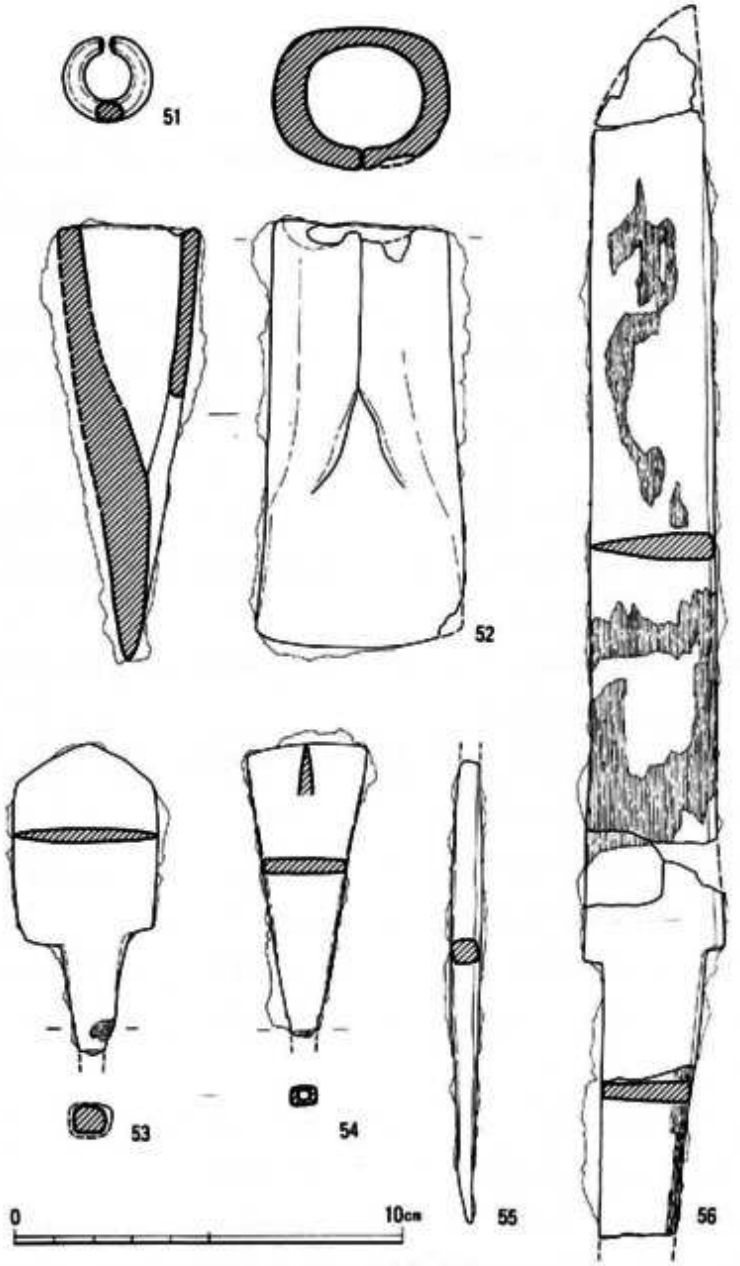
c. 3号墳出土遺物

須恵器(第11図44～49)　44は杯蓋で，平坦な天井部から体部が内彎し，口縁は下垂する。天井部は回転ヘラ削り，体部から口縁は回転ナデ調整。45は天井部に宝珠状摘みをもつ杯蓋。口縁内面にかえりを有する。天井部は回転ヘラ削り，天井部内面は不整方向ナデ，他は回転ナデ調整。46は，大きく外に開いて立ち上がる頸部に内彎気味に口縁が続く。口縁と頸部の境には段が設けられ，頸部中央に2条の沈線がめぐる。体部はやや扁平な球形で，体部最大径よりやや



第11図　須恵器・土師器実測図

上部に沈線1条がめぐる。体部最大径の部位に穿孔を有す。体部下半は回転ヘラ削り，他は回転ナデ調整。47は平瓶。偏球状の体部からやや外反気味に頸部が立ち上がり，口縁端は丸みを持つ。最大径は体部中位にあり，肩に円形浮文を貼りつける。体部の肩以外はカキメ調整で，その後に，一部ヘラによるナデが施される。他は回転ナデ調整。48は長頸壺。肩の張りの強い胴部から細長い口頸部が外反して立ち上がる。底部を欠くが，高台の痕跡が認められる。胴部中位に櫛歯状施文具による列点文が施され，その上下に各1条の沈線が巡らされている。胴部肩以下は回転ヘラ削り，他は回転ナデ調整。49も高台付きの長頸壺。膨らみの強い算盤玉状の胴部から口頸部が大きく外に開いて立ち上がり，底部には外側下方に開いた高台がつく。頸部に2条の沈線がめぐり，胴部中位よりやや上に櫛描波状文とその上下に沈線各1条が巡る。胴



第12図　耳環・鉄器実測図

部下半は回転ヘラ削り，その他は回転ナデ調整。

d. 4号墳出土遺物

土師器(第11図50)　小型の杯で，平坦な底部から内彎して体部が立ち上がり，口縁端は鋭い。内面には，底端部に渦巻状，底端部から体部にかけて放射状の暗文が施され，さらにヘラ描の「×」印が認められる。内外面とも口縁から体部にかけてヨコナデ，外底面は指圧調整がなされている。

鉄器(第12図52～54)　52は袋状鉄斧。銹化が著しい。長さ10.9cm，刃部幅5.3cm。袋部は両側より折り曲げて作られ，断面は丸みを帯びた方形を呈する。内孔径は3×2.6cm。53は変形柳葉式の平根鏃。身の断面は両丸造りで，身の長さは5cm，幅3.7cm，篦被の長さ2cm。茎は断面長方形を呈す。54は斧箭式平根鏃。身は撥型を呈し，身の両側には刃がない。茎は断面長方形を呈す。切先は両刃，身の長さは7cm，幅は切先部で3.1cm，関部0.9cm。

以上のほか，鉄器には刀(第12図56)の出土がある。第12トレンチの地山面で検出されたもので，遺構に伴うものでないため所属時期は明らかでない。切先と茎尻を欠失しているが，残存長30.8cm，身の残存長23.5cm（推定復元長24.2cm)，背の厚さ0.7cm。身幅は切先付近で2.8cm，関部で3.6cm。身は関から切先へとやや幅を狭めている。茎は残存長7.3cm，幅は関部で2.7cm，茎尻にかけて細くなる。厚さは背で0.55cm，刃部側で0.4cm。関は両関作りである。

3．古代～中世

1）掘立柱建物（第13～15図）

本遺跡は，長田川の自然堤防と氾濫原上に立地しており，現地表面にもかなりの礫が露出して遺構の検出が比較的困難であった。そのため確認できなかった柱穴が若干存在することが想像されるが，検出しえた多数の柱穴を基に復元した掘立柱建物について，以下にその概要を記す。

SB－1　I・II地区中央北東部に位置し棟方向を東西方向にもつ身舎3間×2間の建物である。本調査区では，SB-2・SB-10・SB-13と共に最大級の建物であり，建物群の中心家屋であると推定される。桁行長8.5cm，梁行長4.0mを測る。柱間距離は桁方向が2.7～3.0m，梁方向が1.8～2.1m。

SB－2　SB-1の南西側に棟方向を直交させて隣接する建物である。身舎3間×2間で南に廂を持ち，身舎の桁行長は6.5m，廂を含めると8.5m，梁行長は5.2mを測る。柱間距離は桁方向で平均約2.1m，梁方向は2.3mと2.7mである。

SB－3　SB-2の南西側4.5mに棟方向を同じくして隣接し，身舎は3間×1間。桁行長6.4m，梁行長2.5m。柱間距離は桁方向で平均2.1mを測る。

SB－4　SB-2の南側1.2mにSB-2・SB-3と棟方向を同じくして隣接する。身舎2間×1間で，桁行長4.1m，梁行長2.6m。柱間距離は桁方向で平均2.1mを測る。

SB－5　III地区の北西端に位置する身舎2間×2間の総柱建物である。柱穴の大きさと総柱という点から，倉庫と推定される。平面形はほぼ方形，柱間距離は平均で1.7m。

SB－6　III地区の中央部やや西北寄りに位置する身舎2間×2間の建物で，棟方向を北東～南西に振る。比較的大型の柱穴を持ち桁行長3.9m，梁行長3.2m，柱間距離は桁方向で平均2m弱，梁方向で各1.5mを測る。

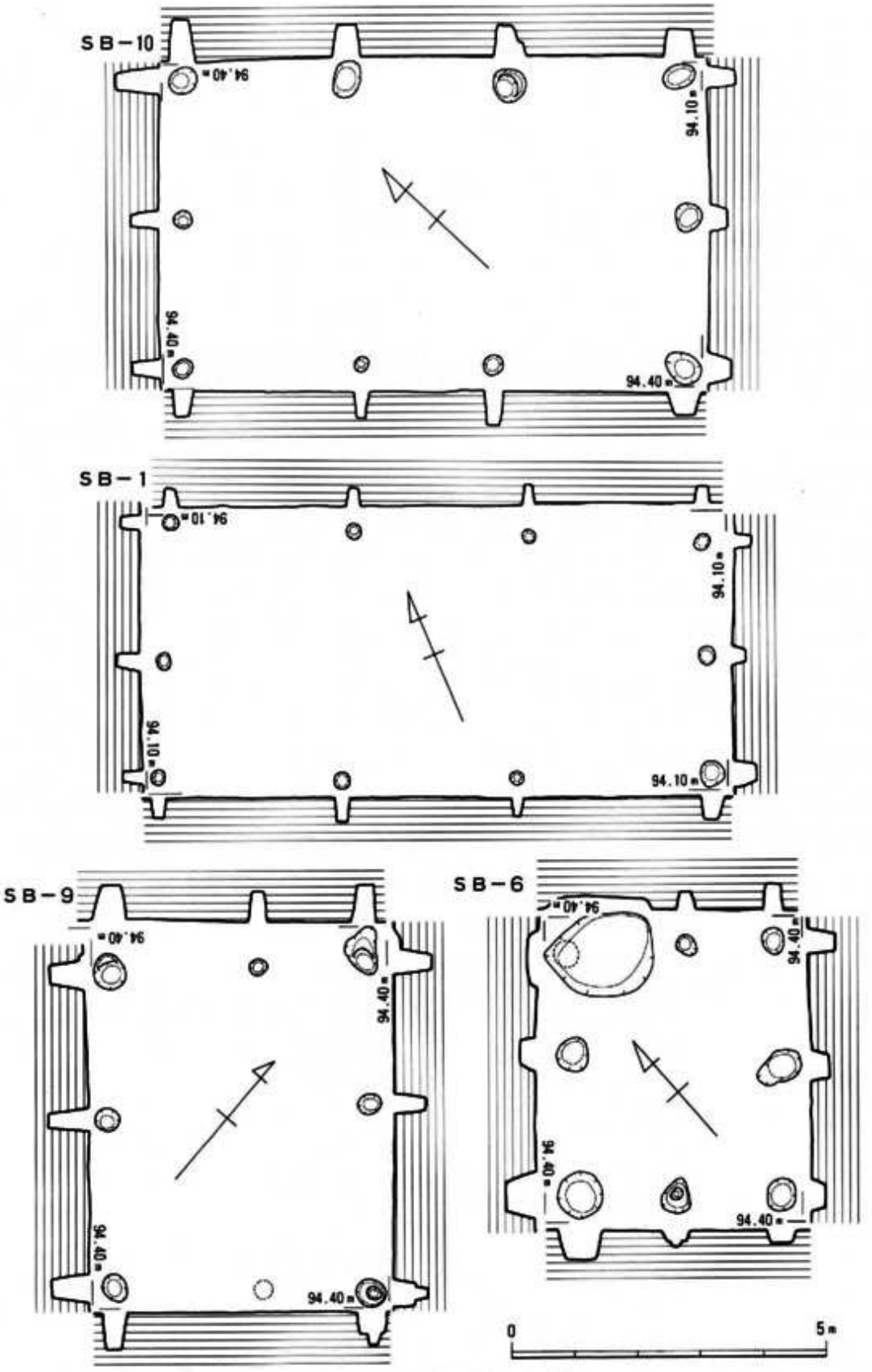
SB－7　SB-6の南西側3.2mに棟方向を直交させて位置する2間×1間の建物である。桁行長7.4m，梁行長3.0m。柱間距離は桁方向が少し長めであり3.7mを測る。

SB－8　SB-6の東側に位置し，棟方向はSB-7とほぼ平行する建物でSB-10と重複する。身舎2間×1間。桁行長4.0m，梁行長1間分としては長めで3.4m，柱間距離は桁方向で各2mを測る。

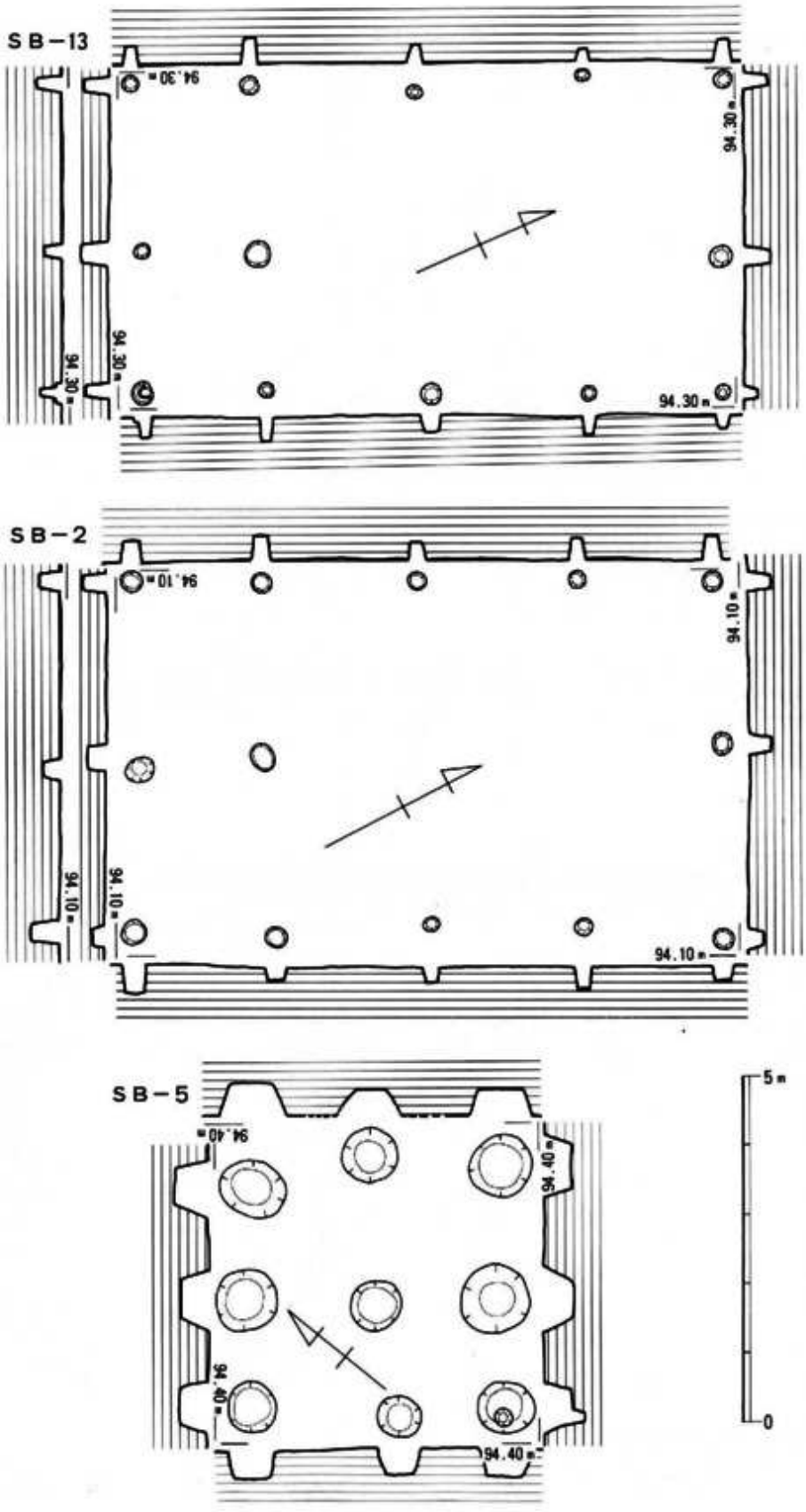
SB－9　SB-8の南西約1mに棟方向を同じくして隣接する。2間×2間の建物と推定されるが南東側の柱穴は検出できなかった。桁行長5.2m，梁行長4.0m，柱間距離は桁方向で2.4～3.0m，梁方向は2.3mと1.8m。

SB－10　SB-9と西隅が重複し棟方向はSB-8・SB-9と同じである。身舎3間×2間。桁行長7.8m，梁行長4.8mを測りIII地区で最大の建物である。柱間距離は桁方向では2.0～3.0mと不揃いであり，梁方向では各2.4m。

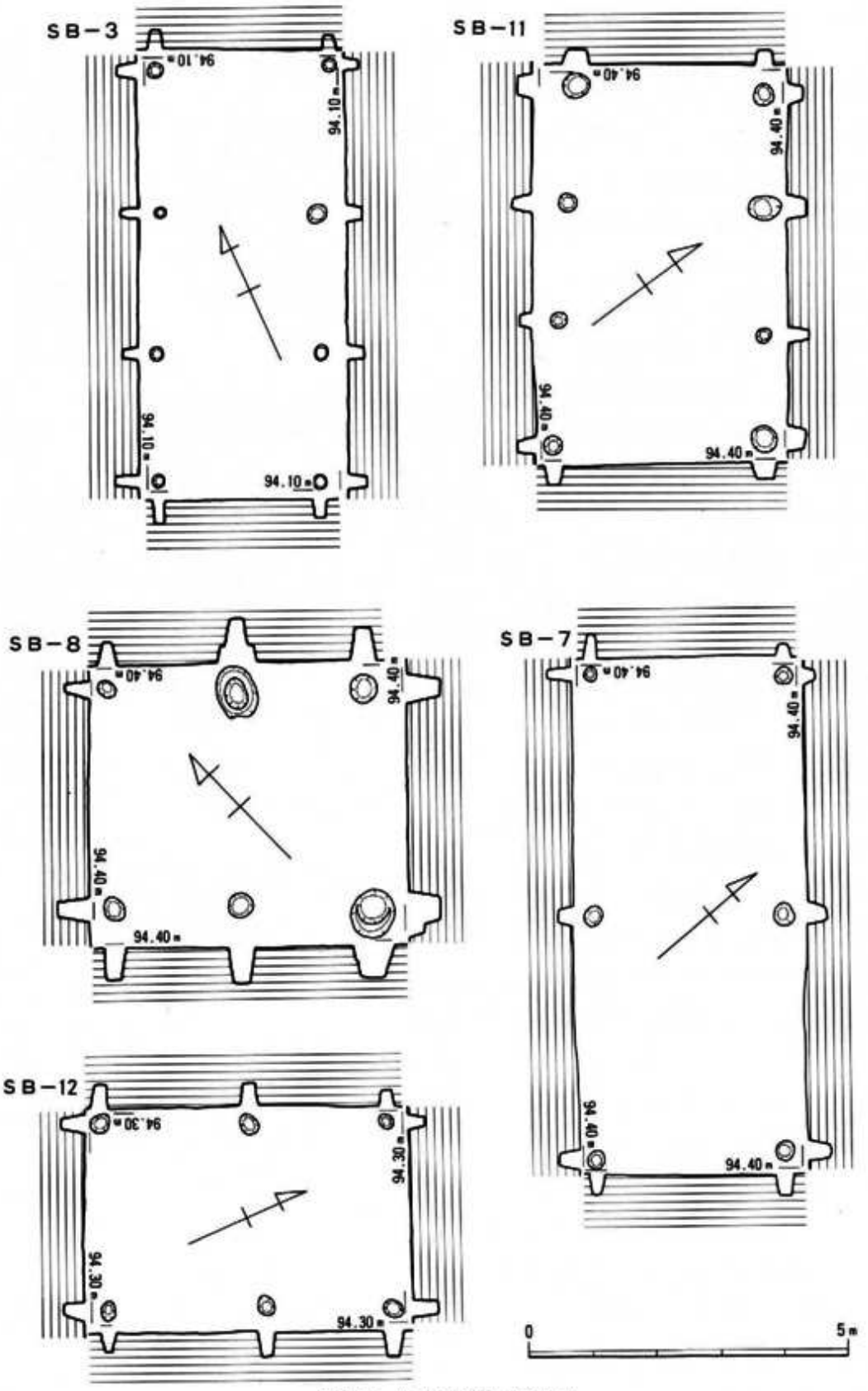
SB－11　SB-7の南東約6mに，棟方向を平行させて位置する身舎3間×1間の建物である。



第13図　掘立柱建物実測図(1)



第14図　掘立柱建物実測図(2)



第15図　掘立柱建物実測図(3)

桁行長5.5m，梁行長3.1m，柱間距離は桁行長で1.8～2.0mを測る。

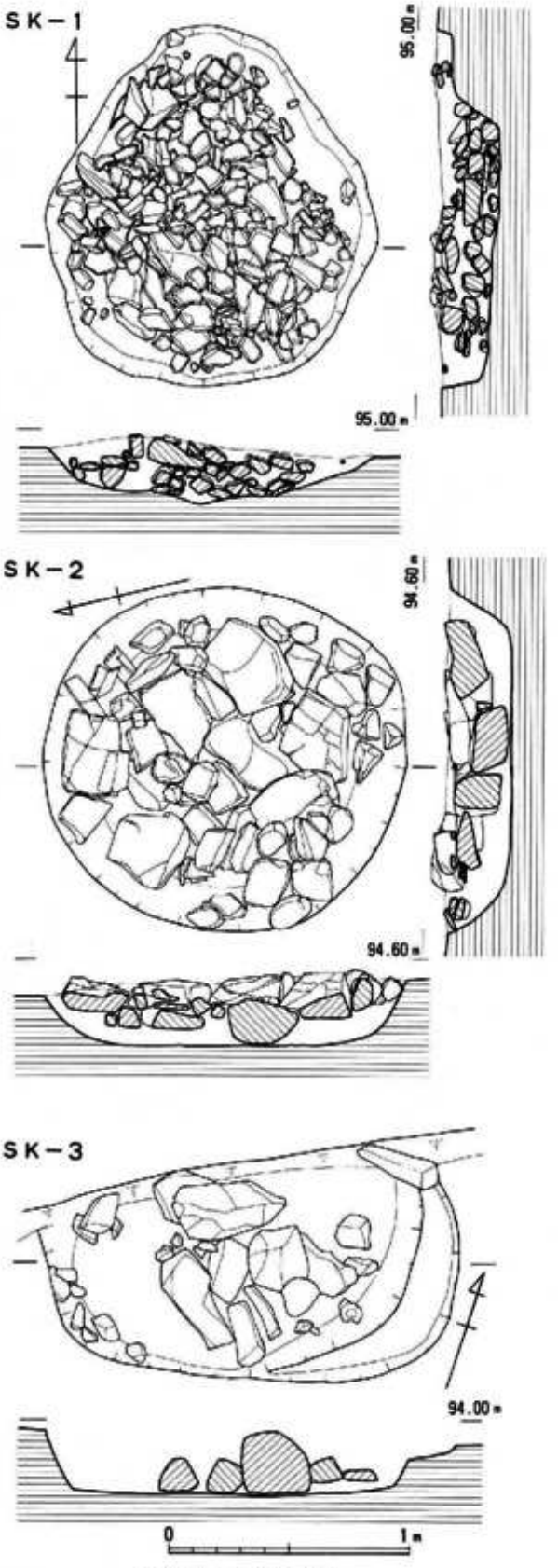
SB—12　Ⅳ地区の西側の建物で，身舎2間×1間，棟方向はⅠ・Ⅱ地区のSB-2・SB-3・SB-4と同方向である。桁行長4.4m，梁行長2.8m，柱間距離は桁方向で各2.0～2.4mを測る。

SB—13　SB-12の北東側5.5mに平行して並ぶ身舎3間×2間の建物で，南東側に廂を持つ。身舎の桁行長は6.7m，廂を含めると8.4m，梁行長は4.5mを測る。柱間距離は桁方向が1.8～2.4m，梁方向は2.0mと2.5m。

2）土壙・土壙墓（第16図）

SK—1　Ⅰ・Ⅱ地区の北西端に位置する平面不整楕円形を呈する土壙で，長軸149cm，短軸137cm，深さ24cmを測る。長軸方向は南北。北側に深さ8cm程の段を持つが，床面はほぼ平坦である。遺構検出面から床面まで，暗灰褐色粘質土の中に，大小多量の石が認められた。遺物は出土しておらず性格については不明であるが，時期については遺構面が中世末頃の水田化の時点で削平を受けていることから推定して，中世のものと思われる。

SK—2　Ⅰ・Ⅱ地区南東寄り，SB-4の南側に位置する平面ほぼ円形の土壙である。径142cm，深さ26cmを測る。SK-1と同じく遺構検出面から平坦な床面まで大型の石が詰め込まれた状態で確認された。遺物は出土しておらず性格については明らかでないが，時期はSK-1と同じく中世のものと推定される。



第16図　土壙実測図

SK－3　Ⅲ地区西隅に位置する土壙で，西側の一部が調査区外で未掘である。長軸をほぼ東西方向にとり，平面形は隅丸長方形と推定される。長軸171cm，短軸は推定で約95cm，深さ25cmを測る。東側に浅い段を持つが床面はほぼ平坦である。遺物は多くの大型の石に混じって，平安時代末期の輸入白磁椀(58)が1点出土した。形態からみて土壙墓の可能性が強い。

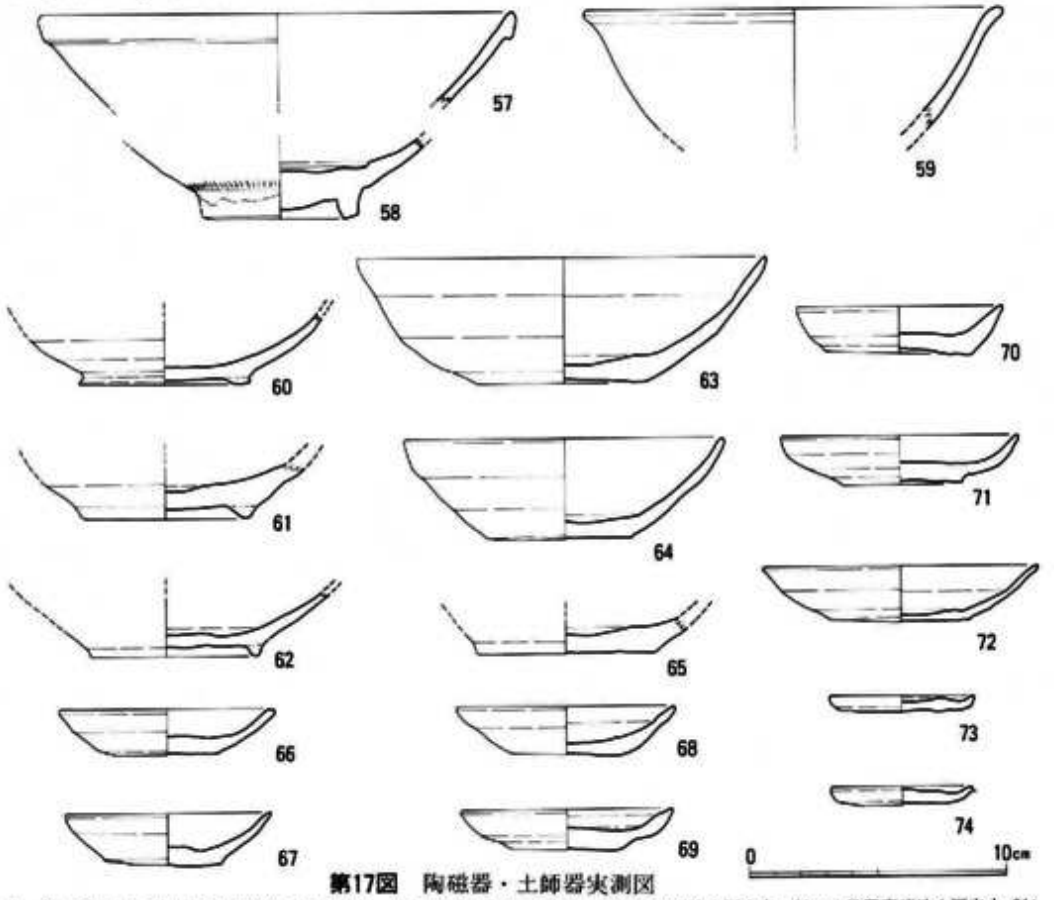
3）溝

SD－1　Ⅲ地区の東南端に位置し，東北から東南方向へほぼ畦畔に平行して走る溝である。若干の出入りはあるが検出できた範囲での長さ24m，幅48～128cm，深さは14～20cmを測る。中央部の一部に長さ4 m，幅約50cmの石列を検出。比較的残存度の良い東側の石列は，20cm前後の石が2段から3段に積まれてあった。遺物は，室町時代前半に比定される瓦質の鍋(75～77)が出土した。

4）出土遺物

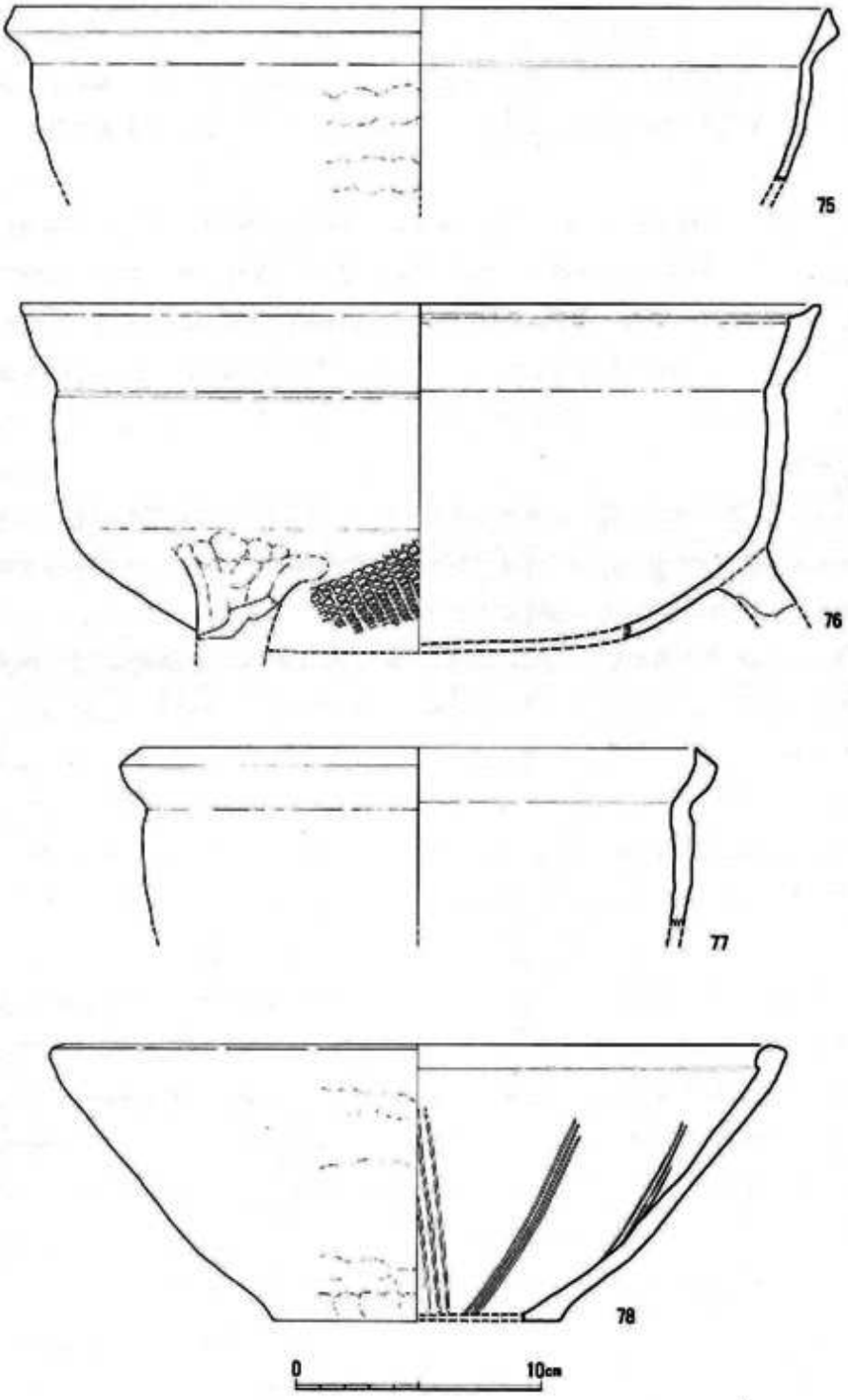
土器(第17・18図)　柱穴・溝・土壙墓を中心として，平安時代～室町時代に属する土師器・瓦質土器・陶磁器などが出土した。残念ながら共伴遺物が少なく，また，量的にも十分ではないので明確な編年の決め手になる資料は少ない。

土師器には，椀・杯・皿があり，量的には皿が多い。椀(60～62)は，底部糸切りの後高台部を



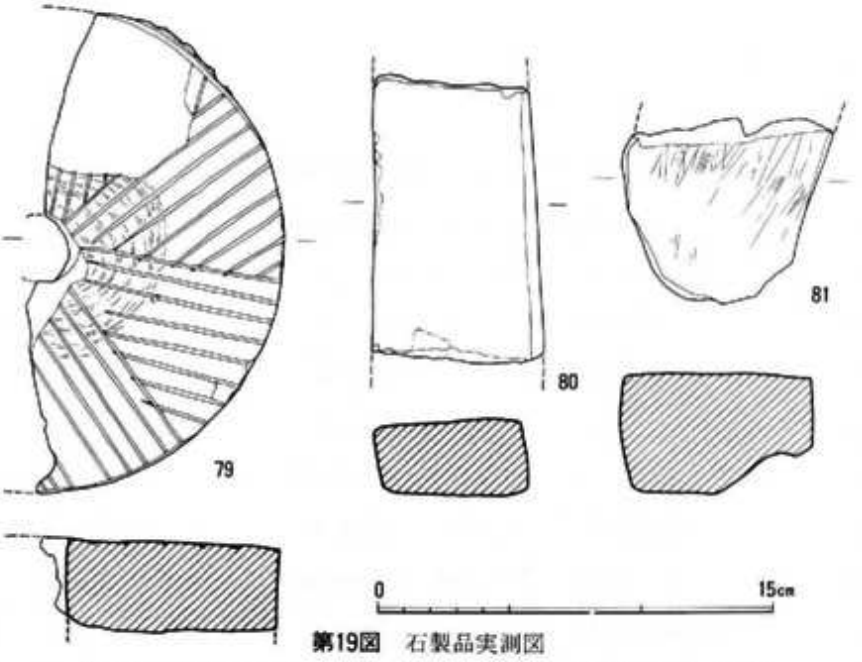
第17図　陶磁器・土師器実測図

57・68・69・73・74：Ⅰ地区西端落ち込み出土，58：Ⅲ地区ＳＫ－３出土，59：Ⅲ地区地山面出土，60：Ⅰ地区南端地山面出土，61：Ⅱ地区ＳＰ－41出土，62・66・67：Ⅲ地区ＳＰ－70出土，63：Ⅲ地区サブトレンチ柱穴出土，64：12トレンチ西端地山面出土，65：Ⅱ地区ＳＰ－32出土，70：Ⅱ地区ＳＰ－25出土，71：Ⅳ地区ＳＰ－８出土，72：Ⅲ地区ＳＰ－81出土



第18図　瓦質土器実測図

75～77：Ⅲ地区ＳＤ－１出土，78：Ⅲ地区東半部地山面出土



第19図　石製品実測図

79：Ⅲ地区サブトレンチ柱穴出土，80：Ⅲ地区ＳＰ－99出土，81：Ⅲ地区ＳＰ－114出土

貼り付けたもので体部はナデ調整，何れも口縁部が欠損している。時期は，平安末から鎌倉時代に比定できよう。杯(63～65)は，63と64が底部糸切りで体部はナデ調整。体部はやや内彎気味に立ち上がり，底部が厚手で底端部が角張る。63は口径15.8cm，器高5.4cmとやや大ぶりである。65は体部から口縁部を欠いており，皿の可能性もあるが，底部が糸切り・厚手で角張る点は同じである。何れも時期は鎌倉時代に比定できよう。

皿（65～74）は，何れも深さ0.6～2 cm前後と浅目の小皿であるが，口径によって8 cm前後のもの，10cm前後のもの，5.5cm前後のものの3種に分けられる。器壁は72が薄手のほかは総じて厚手で，底部は回転糸切り，体部はナデ調整である。時期については66・67が62との共伴遺物であることから，他の皿に先行する可能性が強いが，何れにしても鎌倉時代から室町時代前半のものと推定される。72は，室町時代後半に降るものとみられる。

瓦質土器は，室町時代前期から中期に比定される鍋と擂鉢の破片が出土した。75はSD-1出土の瓦質鍋で口径33cm，口縁部は外開きで器壁は薄めである。外面に成形時の指圧痕が残る。77もSD－1出土の瓦質鍋で，口径32.3cm。器壁は厚めで，口縁が内彎気味に外に開く。76はSD-1出土の土鼎で，口径22.5cm。三足は底部タタキ調整の後に貼り付け，口縁は緩やかに内彎した後短く外に開く。78は瓦質の擂鉢で口径28.5cm，器高11.2cm。口縁は上面平坦で肥厚し端部を内に曲げる。内面には3条単位の条線帯を持ち，外面には成形時の指圧痕が残る。

磁器は，白磁椀や青磁椀等の輸入磁器が若干出土したが，何れも破片である。58はSK-3出土の白磁椀で，底部は厚手で高台は削り出しである。底部と高台部を除いた内外面に，乳白色の釉がかけられていた。59は青磁椀の体部から口縁部片である。灰白色の素地にオリーブ色の釉が厚めにかかっていた。これらの時期は平安時代末に比定されよう。

石製品(第19図)　今回の調査で，石製品の出土は極めて少ない。79は石臼(下臼)で，約18.5cmの臼面に8分割後8本の副溝を刻む。中央に2.5cm内外の芯棒受けの穿孔を持ち，中央部には，研磨痕が残る。80と81は砥石。80は扁平な板状で両面と両側面の4面使用。81は上・側面

の2面使用。81には使用に伴う削痕が認められる。

IV まとめ

今回の調査の結果，古墳4基，古代～中世の掘立柱建物13棟を含む柱穴多数，土壙3基，溝1条などの遺構と，縄文土器，古墳時代の須恵器・土師器・鉄器・耳環，古代から中世の須恵器・土師器・瓦質土器・輸入陶磁器・石製品などの遺物が検出された。

遺跡は，長田川西岸の狭長な沖積微高地に位置している。周囲の水田には多数の河原石が含まれていて，一帯は氾濫原とみなされる状況であったため，予察調査及び今回の本調査を通じてこれだけの遺構や遺物が埋没しているとは当初の予測をはるかに越えるものであった。

特に縄文土器の出土は，遺構こそ確認されなかったものの県内では例数が少ないため，きわめて貴重である。これまでの出土例は比較的沿岸部に多く，内陸部での発掘調査によるまとまった出土例はごく限られている。今後，内陸部に置ける縄文時代遺跡群の展開過程や他地域との関係等を解明していく上での基礎的な資料として注目されよう。

さらに古墳群の検出も，地形的にみれば予測し得なかったものとして注目されよう。微高地の縁辺に沿って4基の古墳が確認されたことは，通常の古墳立地からみれば，きわめて特異なあり方といえよう。中世末頃の付近一帯の水田開発によって墳丘や主体部の大半が削平を受け，周濠や主体部の基底部などごく一部が残存するのみであったため，これらの詳細については不明な点が多い。しかしながら，各遺構の残存状況や相互の位置関係，出土遺物などから考えれば，墳丘規模は1号墳が径約12m，周濠を含めた径約16mの円墳と推定され，2～4号墳もこれとほぼ同程度か若干小規模のものではなかったかと思われる。主体部は1号墳・2号墳は南向きに開口する横穴式石室であったと推定される。3号墳は主体部も全く残存しないため明らかでない。これら3基からは各種の須恵器を出土しており，いずれも同一タイプの杯を伴っており，築造時期に大きな差はないものとみられる。7世紀前半でも新しい段階に比定されるものと推定されよう。4号墳の主体部は，竪穴系横口式石室の系譜に連なる可能性もある特異な石室であるが，南側小口部付近の削平や石材抜去によって手がかりが乏しいため断定し難い。時期としては，石室内から出土した土師器杯及び鉄鏃の形態からみて7世紀前半代に比定することが妥当と思われる。県内ではジーコンボ古墳群の中に，横穴式石室の系譜を引く特異な構造の石室が知られているが，4号墳の年代的な位置づけからみれば，いずれにしても地域的特色の強く反映されたあり方を示すものとみられよう。

これら4基の古墳の築造順序については定かではないが，微高地縁辺にほぼ等間隔に位置している状況や出土遺物に大きな年代差は認められないことからみて，ほぼ7世紀前半から中葉の間に4基が継続的に築造されたものと推定されよう。

古代から中世の集落関連遺構群は，調査地区のほぼ全面にわたって検出された。復元し得た掘立柱建物は13棟であるが，これらはⅠ・Ⅱ・Ⅵ地区のものとⅢ地区のものとでは若干棟方向

を異にしており，大きくはこの二つの建物群に群別できよう。これらの建物群は出土遺物が乏しいため細かな時期比定が困難であるが，調査区から出土した土器には平安時代後期から室町時代まで幅があるものの，量的には鎌倉時代末から室町時代前半期のものが多く，集落の主たる形成期はこの間にあったものと推定される。これらの建物群は，さらに若干南北へ分布の広がりを持つと推定されるが，東西は地形的にみてほぼ調査区内でおさまっているとみてよい。こうした分布状況や地形からみてこの一連の建物群は，周囲から若干高まった島状微高地を選地して形成された単位集落とみなしてよいであろう。各建物の規模をみると，県内の中世村落の建物と比べて比較的大きな規模のものが多い。そこには集落の経済的側面が強く反映されているものと思われ，あるいは集落を構成した階層の性格に起因するものともいえよう。棟方向を異にする二つの建物群が，時期差によるものかあるいは集落内における集団成員の構成上の差に起因するものかは問題である。これらが村落構成上のいかなる単位に位置づけられるかの問題と相俟って，さらにこの地域一帯の中世村落の類例の増加を待って再度検討すべき課題といえよう。

今回の調査を通じて，長田川西岸に置ける小さな微高地上の歴史的変遷はほぼ明らかとなった。縄文時代後期に人々の営為が始まり，縄文時代晩期に再び生活の舞台となる。長い空白の後，古墳時代の後期には古墳が相次いで築造され，墓地として利用された。さらに平安時代末期から室町時代前半頃まで，多少の断続はありながらも集落が形成されていた。この集落は鎌倉時代末から室町時代前半頃に盛期を迎え，室町時代後半には衰退する。室町時代末頃には付近一帯の大規模な水田開発がなされ，ほぼ現在までの水田景観が出現した。さらに今回の調査を境にして，この水田風景は新たに大きく変貌を遂げようとしている。

山口県埋蔵文化財調査報告　114集

立　石　遺　跡

—昭和62年度県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告—

昭和63年２月

編集　財団法人　山口県教育財団
（山口市大手町2130）
山口県教育委員会文化課
（山口市滝町１－１）
山口県埋蔵文化財センター
（山口市春日町３－22）

発行　財団法人　山口県教育財団
（山口市大手町2130）
山口県教育委員会
（山口市滝町１－１）

印刷　大村印刷株式会社
（防府市仁井令1505）